

研究紀要

collection vol.54



〔研究報告〕

1. 保育者養成校と保育現場における音楽表現の指導に関する一考察

～学生の実習先へのアンケート調査結果より～

佐藤 敦子 1

2. 学生の身体表現が持つ特性の傾向についての検討

～童謡からイメージする動きに着目して～

長久保和子 13

3. 保育者の役割の理解を促がす授業教材についての検討

～多文化保育・教育の授業における保育学生の感想に注目して～

中野 明子 29

4. PBLにおける情報共有ツールとしてのSNS活用

～福島学院大学における取り組みを事例に～

木村 信綱 43

SUMMARY STUDY REPORTS 2018

福島学院大学

大学院・福祉学部・短期大学部

筆 者 紹 介

佐 藤 敦 子	教 授	保 育 学 科
長久保 和 子	准 教 授	保 育 学 科
中 野 明 子	講 師	保 育 学 科
木 村 信 綱	准 教 授	情 報 ビジネス 学 科

保育者養成校と保育現場における音楽表現の指導に関する一考察 －学生の実習先へのアンケート調査結果より－

An inquiry into a study of teaching music expression at a nursery school
and a school for nursery and kindergarten teachers training :
Focusing on the survey by questionnaire at the preschools

佐藤 敦子
Atuko Sto

目 次

1. 本研究の目的
 2. アンケート調査について
 3. アンケート調査の結果
 4. 調査結果の解釈と考察
- <結語>

キーワード：声域・音域、楽器演奏、身体表現、リトミック、音楽療法

key words : a range of voice, a register, music instrumental performance, a physical expression, eurhythmics, music therapy

1. 本研究の目的

本学では、保育学科1年生が履修している音楽表現領域「幼児音楽」授業において保育現場に即した授業内容を展開している。主な内容は童謡、生活の歌、季節の歌、身体表現を伴ったわらべ唄、あそび歌、踊りの歌などさまざまなジャンルの歌唱指導である。歌唱に加え、楽器演奏（ハンドベル、トーンチャイムを含む）、そしてミニ・ミュージカルの発表を取り入れ、さらに音楽療法の内容も取り入れている。そして正しい楽譜を読むことが出来る様に簡単な音楽理論を取り入れている。しかし保育現場ではこのような教育内容を果たして実際に必要としているのだろうか。必要だとしても、実際にはどの分野が重視され、活用されているのだろうか。筆者は以前、保育現場での歌唱指導法について、幼児の歌唱行動の追跡調査から幼児の声域・音域、うたわれる歌のジャンルについて論じた¹⁾²⁾³⁾。子どもの声帯は発達途上にあるためにうたう音程が低い子どもがいることが分かった。幼児にうたわれる歌

のジャンルについては童謡・唱歌が多く、身体表現を伴う歌がみられた。しかしこれらの知見は時代の流れとともに変化しているのではないかと考える。現在の保育現場での歌唱指導法と現場で求める歌のジャンルから探してみたい。また保育現場で求める音楽表現の教育内容とは何か。この3点について今回実施した実態調査から調べてみたい。それらから保育者養成校に必要な音楽表現教育について考えてみたい。先行文献については智原らが実施した、言語、身体、造形、音楽にかかわる表現領域全般について京都府南部の幼稚園・保育所へアンケート調査し、表現領域の活動に対応した保育者養成教育の在り方について述べた「幼稚園・保育所における表現領域の活動に対応した保育者養成教育の在り方」⁴⁾を参考にしてアンケート用紙や質問事項を作製した。

2. アンケート調査について

- (1) アンケート調査の日時
・2015年8月下旬～10月下旬／／
- (2) 調査対象先
2014年東北地区のF短期大学保育科2年生保育科第一部・保育科第二部3年生・福祉心理学科学生実習先
226箇所
①保育実習先（保育所・認定こども園）118箇所
②幼稚園実習先（幼稚園・認定こども園）108箇所
- (3) 調査方法・調査対象先
アンケートの配布・回収方法について
・全園に郵送にて配布・回収
- (4) 回収日 11月下旬
- (5) 回収率 131箇所 58%
- (6) アンケート調査の内容について（項目）
(1) 子どもたちへの歌唱指導の際にどのようなことに注意していますか（複数回答）
①先生方ご自身
②子どもたち
(2) 新しい歌を導入する時の指導法についてお知らせ下さい（複数回答）
(3) 取り上げている歌曲をお知らせ下さい（複数回答）
(4) 歌唱の際に工夫していることはどんな点ですか？（複数回答）
(5) ①遊び歌や手遊び歌、身体表現を伴った歌を使用していますか？（単一回答）
1. 使用している 2. 使用していない
②. ①で「使用している」方へ
曲名を書いて下さい（複数回答）
(6) ①身体表現を伴った歌は必要だと思いますか？
1. はい 2. いいえ
①ではいと答えた方
②理由をお聞かせ下さい（複数回答）
(7) 歌唱で必要と思われるジャンルについてお答え下さい（複数回答）
(8) その他、先生方が歌唱法や歌に関して日頃保育者養成校に対してのお考えがあれば、お聞かせ下さい（複数回答）
(9) ピアノや歌唱以外に先生が音楽教育に必要なと思われる分野についてお答え下さい。（複数回答）

<アンケート調査内容>

歌唱についてのアンケート

(1) 子どもたちへの歌唱指導の際にどのようなことに注意していますか。

①先生方ご自身に対する心がけ、②子どもたちに対する指導 それぞれについて、いくつでも番号に○印をつけて下さい。

①先生方ご自身	②子どもたち	
1	1	音程を正確にうたう(うたえる)ように注意している
2	2	リズムを正確にうたう(うたえる)ように注意している
3	3	言葉をはっきり発音し、周囲にきちんと届く声で、歌の内容が伝わるように注意している
4	4	素敵な声でうたう(うたえる)ように注意している
5	5	優しくかたりかけるようにうたう(うたえる)ように注意している
6	6	怒鳴ってうたわないように注意している
7	7	日本語の言葉の意味を理解しながらうたう(うたえる)ように注意している
8	8	リズムに乗ってリズムカルにうたえるように注意している
9	9	楽しくうたう(うたえる)ように注意している
10	10	ピアノ等の伴奏を間違えないように注意している
11	11	その他:先生方ご自身への心がけ(具体的に記入して下さい)
12	12	その他:子どもたちへの指導の際に心がけていること(具体的に記入して下さい)

(2) 新しい歌を導入する時の指導法についてお知らせ下さい。(いくつでも○印をつけて下さい)

1. 歌詞を書いている	2. メロディをフレーズごとに区切って教えている
3. 保育者が口伝えて教えている	4. 繰り返し反復させてうたわせている
5. ペープサートを使用している	6. エプロンシアターを使用している
7. ピアノ伴奏を活用している	
8. その他(具体的に記入して下さい)	

(3) 取り上げている歌曲をお知らせください。

	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
4月				
5月				
6月				
7月				
8月				
9月				
10月				
11月				
12月				
1月				
2月				
3月				

(4) 歌唱の際に工夫していることはどんな点ですか？

(例：ペープサートを使用している、紙芝居を読んでから、手遊びから導入等)

--

(5) ① 遊び歌や手遊びの歌、身体表現を伴った歌を使用していますか。(どちらか一方に○をつけて下さい)

1. 使用している 2. 使用していない

→ 「2. 使用していない」とお答えになった方は、(6)へ進んでください。
 → ①で、「1. 使用している」と答えた方へ、
 ②曲名をお知らせ下さい。(具体的に記入して下さい)

--

(6) ① 身体表現を伴った歌は必要だと思いますか。(どちらか一方に○印をつけて下さい)

1. はい 2. いいえ

→ 「2. いいえ」と答えた方は、(7)へ進んでください。
 → ①で、「1. はい」と答えた方へ、
 ②理由をお聞かせ下さい。(いくつでも○印をつけて下さい)

- | |
|----------------------|
| 1. 歌を覚えやすいから |
| 2. リズムに乗ってうたえるから |
| 3. 子どもたちが好きだから |
| 4. その他 (具体的に記入して下さい) |

(7) 歌唱で必要と思われるジャンルについてお答え下さい。(いくつでも○印をつけて下さい)

- | |
|---|
| 1. 童謡・唱歌 |
| 2. わらべ歌 |
| 3. 遊び歌・身体表現を伴った歌(谷口國博さんや佐藤弘道先生等のように運動会やお遊戯会で使用できる曲) |
| 4. 手遊び歌(従来のように指や手先を動かす歌) |
| 5. テレビ、アニメの歌 |
| 6. 歌謡曲 |
| 7. その他 (具体的に記入して下さい) |

(8) その他、先生が歌唱法や歌に関して日頃保育者養成校に対してお考えのことがあれば、お聞かせ下さい。

例：もっと歌のレパートリーを増やしてほしい、あそび歌をもっと指導してほしい、歌唱指導に関してもう少し力を入れてほしい等

(9) ピアノや歌唱以外に先生が音楽教育に必要なと思われる音楽分野についてお答え下さい。

(いくつでも○印をつけて下さい)

- | |
|----------------------|
| 1. 音楽療法 |
| 2. リトミック |
| 3. オルフ |
| 4. コダーイ |
| 5. 楽器遊び |
| 6. ミニ・ミュージカル発表会等の実施 |
| 7. その他 (具体的に記入して下さい) |

※ご協力ありがとうございました。

3. アンケート調査の結果

*以下に調査設問ごとの結果を示す。なお本編に関係のない質問は省いた。

(1) 子どもたちへの歌唱指導の際にどのようなことに注意していますか(複数回答)

- ①先生方ご自身
- ②子どもたち

(2) 新しい歌を導入する時の指導法についてお知らせ下さい(複数回答)

(3) 取り上げている歌曲をお知らせ下さい(複数回答)

*この項目については今回対象としない。

(4) 歌唱の際に工夫していることはどんな点ですか?(複数回答)

大きく“ペープサート”(ペープサートとパネルシアターを一緒にした)“手あそび”“絵本”“振り付け”“紙芝居の5項目にした。

(5) ①遊び歌や手遊び歌、身体表現を伴った歌を使用していますか?(単一回答)

- 1. 使用している
- 2. 使用していない

②. ①で「使用している」方へ

曲名を書いて下さい(複数回答)

*今回この項目は対象としない。

(6) ①身体表現を伴った歌は必要だと思いますか(単一回答)

- 1. はい
- 2. いいえ

①ではいと答えた方

②理由をお聞かせ下さい(複数回答)

(7) 歌唱で必要と思われるジャンルについてお答え下さい(複数回答)

(8) その他、先生方が歌唱法や歌に関して日頃保育者養成校に対してのお考えがあれば、お聞かせ下さい(複数回答)

*今回この項目は対象としない。

(9) ピアノや歌唱以外に先生が音楽教育に必要なと思われる分野についてお答え下さい(複数回答)

4. 調査結果の解釈と考察

(1) 子どもたちへの歌唱指導の際にどのようなことに注意していますか(複数回答)

①先生方ご自身

先生方自身に関する心がけとしては“リズムを正確にうたう”が87.8%、“音程を正確に歌うが87.0%”、“言葉をはっきり発音し、周囲にきちんと届く声で歌の内容が伝わるように注意している”が80.9%、リズムに乗ってリズムカルにうたえるように注意しているが67.9%、“素敵 な声でうたう(うたえるように注意している)”が61.8%だった。

②一方子どもたちに対する注意としては“怒鳴ってうたわないように注意しているが87.0%”楽しくうたう(うたえるように)注意しているが“82.4%”素敵 な声でうたう(うたえるように)注意しているが

“56.5%、リズムに乗ってリズムカルにうたえるように注意しているが56.5%だった。

保育者自身への注意と子どもたちへの注意については乖離がみられた。

保育者自身はリズム、音程、発音、声のボリュームまで注意し、子どもたちには楽しくうたって欲しいと言う。また楽しくうたって欲しいと思う一方で、怒鳴ってうたうことを注意している。この怒鳴ってうたう、という点について考えてみたい。久保田も述べているように、『怒鳴ってうたうと音程が正確に取れない場合や、友達と声を合わせる楽しさを感じ取ることが出来なかつたり、どなり声を出し続けると囁声になる心配もある⁵⁾』と警鐘を鳴らしている。その一方で筆者は怒鳴ってうたうことを子どもたちに注意することで、逆に子どもたちがうたうことへの意欲や楽しさを損なわないかと危惧する。筆者は子どもが怒鳴り声でうたうことには、幼児の声域・音域が関係していると考えている。以前の調査で⁶⁾4歳児でも声域が広くへから二点Dまで声域のある子どももいたが、一般的に音程は狭く音域は低いのではないかと考える。久保田は『幼児の無理のない声域は、1歳～2歳1点C～1点G、3歳児は1点C～1点G、4歳児は1点C～1点G～A、5歳児はロ・変ロ～1点G～A、6歳児はロ～1点G～Aと』述べている⁷⁾。これらのことから、怒鳴る声を抑えるためには、子どもたちに注意するのではなく、教える側が既成の歌を低く移調してうたわせるようにしてはどうかと考える。保育者は歌唱に際にピアノ伴奏で指導する機会が多い。保育者が伴奏を子どもの声域に合わせる事が大事なことではないかと考える。

＜附録1＞アンケート結果 度数分布

(1) 子どもたちへの歌唱指導の際にどのようなことに注意していますか。①先生方ご自身に対する心がけ (いくつでも○印をつけて下さい)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	有効回答者数	回答不備	全回答者数	
音程を正確にうたう(うたえる)ように注意している	リズムを正確にうたう(うたえる)ように注意している	言葉をはっきり発音し、周囲にきき回し、声で、歌の内容が伝わるように注意している	素敵な声でうたう(うたえる)ように注意している	優しくかたかりかけるように注意している	怒鳴ってうたわないように注意している	日本語の言葉の意味を、理解しながらうたう(うたえる)ように注意している	リズムに乗ってリズムミカルにうたう(うたえる)ように注意している	楽しくうたう(うたえる)ように注意している	ピアノ等の伴奏を間違えないように注意している	その他：先生方ご自身への心がけ(具体的に記入して下さい)	96.9%	3.1%	100.0%	
87.0%	87.8%	80.9%	61.8%	48.9%	58.8%	59.5%	67.9%	86.3%	57.3%	36.6%	127	4	131	
(人数)	114	115	106	81	64	77	78	89	113	75	48	127	4	131

(1) 子どもたちへの歌唱指導の際にどのようなことに注意していますか。②子どもたちに対する指導 (いくつでも○印をつけて下さい)

1	2	3	4	5	6	7	8	9	11	有効回答者数	回答不備	全回答者数	
音程を正確にうたう(うたえる)ように注意している	リズムを正確にうたう(うたえる)ように注意している	言葉をはっきり発音し、周囲にきき回し、声で、歌の内容が伝わるように注意している	素敵な声でうたう(うたえる)ように注意している	優しくかたかりかけるように注意している	怒鳴ってうたわないように注意している	日本語の言葉の意味を、理解しながらうたう(うたえる)ように注意している	リズムに乗ってリズムミカルにうたう(うたえる)ように注意している	楽しくうたう(うたえる)ように注意している	その他：子どもたちへの指導の際に心がけていること(具体的に記入して下さい)	96.9%	3.1%	100.0%	
33.6%	44.3%	32.1%	56.5%	17.6%	87.0%	32.8%	55.7%	82.4%	35.1%	127	4	131	
(人数)	44	58	42	74	23	114	43	73	108	46	127	4	131

(2) 新しい歌を導入する時の指導法についてお知らせ下さい。(いくつでも○印をつけて下さい)

1	2	3	4	5	6	7	8	有効回答者数	回答不備	全回答者数	
歌詞を書いている	メロディをフレーズごとに区切って教えている	保育者が口伝で教えている	繰り返し反復させてうたわせている	ペープサートを使用している	エプロンシアターを使用している	ピアノ伴奏を活用している	その他(具体的に記入して下さい)	99.2%	0.8%	100.0%	
72.5%	49.6%	82.4%	67.2%	52.7%	6.1%	73.3%	25.2%	130	1	131	
(人数)	95	65	108	88	69	8	96	33	130	1	131

(3) - 1 取り上げている歌曲をお知らせください。

(今回は対象としない)

(3) - 2 取り上げている歌曲をお知らせください。

(今回は対象としない)

(4) 歌唱の際に工夫していることはどんな点ですか？

(例：ペープサートを使用している、紙芝居を読んだから、手遊びから導入等)

1	2	3	4	5	6	7	8	全回答者数	
ペープサート・パネルシアターを使用している	手あそびを取り入れている	絵本を読み聞かせしている	振りつけを取り入れている	紙芝居を取り入れている	その他	記入あり	記入なし	100.0%	
45.8%	19.1%	9.2%	9.2%	7.6%	32.1%	88.5%	11.5%	131	
(人数)	60	25	12	12	10	42	116	15	131

(5) ① 遊び歌や手遊びの歌、身体表現を伴った歌を使用していますか。(どちらか一方に○をつけて下さい)

1	2	回答不備	合計
使用している	使用していない	1.5%	100.0%
95.4%	3.1%	2	131
(人数)	125	4	131

(5) ② 曲名をお知らせ下さい。

(今回は対象としない)

(6) ① 身体表現を伴った歌は必要だと思いますか。 (6) ② 理由をお聞かせ下さい。

(どちらか一方に○印をつけて下さい)

1	2	回答不備	合計
はい	いいえ		
90.8%	2.3%	6.9%	100.0%
(人数) 119	3	9	131

(いくつでも○印をつけて下さい)

1	2	3	4	有効回答者数	回答不備	全回答者数
歌を覚えやすいから	リズムに乗ってうたえるから	子どもたちが好きだから	その他(具体的に記入して下さい)			
74.8%	85.7%	87.4%	24.4%	99.2%	0.8%	100.0%
(人数) 89	102	104	29	118	1	119

(7) 歌唱で必要と思われるジャンルについてお答え下さい。(いくつでも○印をつけて下さい)

1	2	3	4	5	6	7	有効回答者数	回答不備	全回答者数
童謡・唱歌	わらべ歌	遊び歌・身体表現を伴った歌(谷口園博さんや佐藤弘道先生等に運動会やお遊戯会で使用できる曲)	手遊び歌(従来のように指や手先を動かす歌)	テレビ、アニメの歌	歌謡曲	その他(具体的に記入して下さい)			
97.7%	96.2%	84.7%	94.7%	46.6%	23.7%	6.1%	99.2%	0.8%	100.0%
(人数) 128	126	111	124	61	31	8	130	1	131

(8) その他、先生が歌唱法や歌に関して日頃保育者養成校に対してお考えのことがあれば、お聞かせ下さい。

(今回は対象としない)

(9) ピアノや歌唱以外に先生が音楽教育に必要と思われる音楽分野についてお答え下さい。(いくつでも○印をつけて下さい)

1	2	3	4	5	6	7	有効回答者数	回答不備	全回答者数
音楽療法(「気分になる子」や「発達障害児」の指導も含む)	リトミック	オルフ	コダーイ	楽器遊び	ミニ・ミュージカル発表会等の実施	その他(具体的に記入して下さい)			
50.4%	78.6%	3.1%	5.3%	89.3%	29.8%	7.6%	93.9%	6.1%	100.0%
(人数) 66	103	4	7	117	39	10	123	8	131

保育者に楽譜を子どもの声域に合わせて移調して弾く技量が求められる。子どもたちがうたい易い低い音域に移調することで、無理なくうたえれば子どもたちは怒鳴ることなくうたうことが出来るのではないかと考える。興味深い事実がある。大声を張り上げて怒鳴るようにしてうたう子どもを筆者は体験している。そこで筆者は前述したように、以前から怒鳴るようにうたう子どもがいるのは音域が合わないためではないかと考えていた。子どもたちにとってはうたう音域が高いのではないかと考えた。そこで、特にうたう機会の多い「園歌」について原曲を低いキーに移調してうたってもらった。5歳児クラスの園児全員に一斉指導の際に自然な形で園児たちの中に入り、「みんなの歌が聞きたい」と話して、1回目はCdur(1点C～2点C)で、

次にAdur(い～1点A)に下げうたってもらった。その結果二度下げたAdurのキーでうたった場合は張り上げる声が出なかった。子どもの声域と関係している表れだろう。このことから改めて子どもたちの歌唱の際の怒鳴り声には音域・声域が関係していることが分かった。加えて園児たち自身にどちらがうたい易いか聞いて見た。園児たちは筆者が後から弾いたAdurの伴奏を「後から弾いた方がうたい易い」と一斉に答えた。また担任にも確認したが「低いキーの方がうたい易そうで、怒鳴り声を感じなかった」と述べた。もう一つ感じるのは、幼児は自分がうたっていることで無意識に自分の存在価値をPRしたい、一生懸命うたって自分を認めてもらいたいという気持ちが強く、その思いの強さが、つい怒鳴り声に結びついてしまう一

面もあるのではないかと思える。筆者はアンケート調査から保育者たちが、怒鳴り声を注意したり、美しい声でうたうことを強要したら、子どもたちから歌をうたう意欲や興味・関心を失くしてしまうのではないかと考えている。幼児のうたいたい、表現したいと言う気持ちを大切にしたいと考える。怒鳴り声に対しての注意は慎重にする必要があると感じた。そして子どもたちが怒鳴らないようにうたう一つの方法として、筆者が本園の園児たちに意識させることなく、自然な形で移調して歌わせるのは一つの解決法だと考える。

さらにこの事実はまた学生の「幼児音楽」授業においても共通している場合がある。現在学生の中にも歌唱指導および歌唱の試験の際に既成の楽譜では音域が合わずに音程がずれているように聴こえる学生が数名いる。筆者はその際にこの幼児の声域の事実を当てはめて、それらの学生に試験曲を筆者は学生のうたい易いキーに移調して低いキーで伴奏してうたわせている。低いキーに移調してうたった場合、その中のほとんどの学生は音程が取れ、うたっている。この幼児の声域・音程の事実の応用は学生の歌唱の指導上も大きく役立った。

(2) 新しい歌を導入する時の指導法について

“保育者が口伝えて教えている”が82.4%、“ピアノ伴奏を活用している”が73.3%、“歌詞を書いている”が72.5%、“繰り返し反復させてうたわせている”が67.2%、“ペープサートを使用している”が52.7%、“メロディをフレーズごとに区切って教えている”が49.5%だった。

(3) 取り上げている歌曲について

*今回この項目は対象としない。

(4) 歌唱の際に工夫していることはどんな点か。(自由記述)

“ペープサートを使用している”が45.8%、“手あそびを取り入れている”が19.1%

“絵本を読み聞かせている”が9.2% “振り付けを取り入れている”が9.2%、“紙芝居を取り入れている”が7.6%だった。

(2)と(4)が類似している内容だったために、合わせて考察してみたい。

①ピアノ伴奏の活用について

新しい歌の導入時におけるピアノ伴奏の有無につい

てであるが、このことについて水崎はピアノ伴奏について、幼児の歌唱指導に欠かせないと述べ、また音の正確さを伝えるためにも、ピアノ無しよりも伴奏ありの条件の方がより正確な音で歌唱することを明らかにしており⁸⁾、筆者も同様に感じている。筆者は幼児音楽の授業で学生への歌唱表現指導の際、常にピアノを使用している。正確な音を子どもたちに伝えることも大切なことだと考える。智原らは、「保育者の知識・技能として、弾き歌いをする、幼児歌曲にコード伴奏をつける」⁹⁾と述べているが、筆者も同感である。筆者は幼児歌曲に簡単なコード伴奏を用いることは、子どもたちの顔を見ながら子どもたちに語りかけて歌うこともできると考えており、1年次「幼児音楽授業」にて簡単な伴奏、簡易伴奏法、右手はメロディで左手は主要三和音のみで弾けるコード伴奏法を導入している。また正確な音を出すピアノ伴奏があった方が幼児も安心してうたえると感じている。歌唱表現指導する保育者にとってもピアノという正確な音で歌唱表現指導する方が安心出来ると思う。保育者へのピアノへの技量も求められる。

②ペープサートや絵本、紙芝居の導入について

筆者も「幼児音楽」授業で視覚からの刺激で、ペープサートや絵、紙芝居の活用が効果があると指導しており、筆者は幼児音楽の授業での歌唱表現テストの際に学生たちに積極的に導入させている。このようにペープサート、絵本、紙芝居等絵を導入することについて考えてみたい。

土井田らは、子どもが新しい歌に対して興味・関心が持てる方法について鳥取市内の幼稚園へアンケート調査した結果、“興味・関心が持てるようにするためにペープサートをする、絵を見せる、絵本を読む”等が挙げられ¹⁰⁾、筆者の実施した調査結果と同様だった。絵本や紙芝居、ペープサートと言った絵を使って視覚的に働きかける保育者が多かった。視覚的刺激は歌唱表現の導入の際、子どもたちが歌唱を獲得するのに効果的である考える。子どもたちは絵や紙芝居を用いることにより目からも楽しむことで、さらに歌への興味が深まっていくのだと考える。視覚的刺激がさらに子どもたちのうたう行動を楽しくしている。

(5) あそび歌や手あそび歌、身体表現を伴った歌を使用しているかについて

*本稿では“あそび歌”“手あそび歌”についても総称して“身体表現を伴った歌”とする。

あそび歌や手あそびの歌等身体表現を伴った歌を使用している園は“使用している”が94.5%、“使用していない”が3.1%で、保育現場では圧倒的に身体表現を伴った歌を取り入れている。

(6) 身体表現を伴った歌は必要か

① “はい”との答えが90.8%、“いいえ”が2.3%、無回答が6.9%だった。

② その理由としては“子どもたちが好きだから”が87.4%、“リズムに乗ってうたえるから”が85.7%、“歌を覚えやすいから”74.8%だった。

(5)、(6)を合わせて考えてみたい。

筆者は、幼児音楽授業でこれら身体表現を伴った歌を多く取り入れている。現代社会を生きる子どもたちにとっては、身体表現を伴うたう歌が音楽表現能力獲得に効果があると考えているからだ。リズムカルな音楽に乗って、幼児の前に表れる力一杯の激しい動きは、いやがおうでも幼児の情動を刺激しその模倣へと導く。その動きを真似る中で子どもたちの情動が発散させられる。身体表現を伴った歌は身体全体で自己表現出来る歌なのだと考える。福島市内、市内近郊区域の幼稚園・保育所から依頼を受ける“親子遊び”や“子育て支援”の講座の中に、また幼稚園教諭対象の免許更新講習時の講座にも取り入れている。いずれの講座でも、この身体表現を伴った歌に保育者や親子は真剣にまた全力で取り組む姿が見られた。また筆者はF大学認定こども園での一斉保育時に園児たちに指導している。子どもたちは真剣に取り組む。0歳児から5歳児まで全員参加となるが、担任の話からも“0歳児も楽しそうに身体を動かしながら参加している”と言う。そして何より、日頃の保育の中で他園児と同一行動の出来難い、“気になる子”“問題行動を起こす子ども”も音楽が鳴り出し筆者が踊りはじめると一緒に踊り出す。筆者の以前の音楽療法に関する研究から、身体表現を伴う歌は発達障害児にも効果がある¹¹⁾と実証されている。また松本は子どもは身体表現する歌について“遊び”として捕えており音楽が単独であるよりも、身体全体で表現しながら歌う方が効果があると述べている¹²⁾。さらに寺澤らも身体活動によって、音楽情動の表現と知覚が正確かつ豊かになる¹³⁾、と述べており筆者の見解と同じである。筆者は音楽表現分野と身体表現分野は密接な関係にあると考えており、“歌あそび”“手遊び”“身体あそびの歌”“踊りの歌”(ダンス)等、身体表現を伴った歌は身体表現のみならず音楽表現で

あると考えている。そしてもう一つ。身体表現を伴った歌は多くの場合友人と一緒に取り組む場合が多い。仲間と一緒に表現し合うことによりコミュニケーション能力も育成されるのではないかと考える。

(7) 歌唱で必要と思われるジャンルについて

“童謡・唱歌”が97.7%、“わらべ唄”が96.2%、“手あそび歌”が94.7%、“あそび歌、身体表現を伴った歌(谷口國博先生・佐藤弘道先生の等のように運動会やお遊戯会で使用できるもの)”が84.7%、“テレビ・アニメの歌”が46.6%、“歌謡曲”が23.7%だった。童謡・唱歌、わらべ唄、手遊び歌が多かった。保育者たちは日本の伝統文化を大切に子どもたちに継承させて行きたいのだと解釈出来る。わらべ唄は本来子どもたちの中から生まれ、子どもたちに引き継がれていく歌である。そのため音階構造や言葉のリズムも日本語と密接に関係しており、子どもたちには無理のない音域やリズムでうたうことが出来る。

(8) その他、保育者が歌唱や歌唱法への保育者養成校に対する考えについて

* 今回この項目は対象としない。

(9) 保育現場で音楽教育に必要と思われること

ピアノや歌唱以外に保育現場から求められる音楽表現の教育分野は楽器あそび、リトミック、音楽療法の分野が挙げられるのではないかと予測する。果たして実態はどうであろうか。

“楽器あそび”が89.3%、“リトミック”が78.6%、“音楽療法(“気になる子”や発達障害児の指導も含む)”が50.4%、“ミニ・ミュージカル発表会等の実施”が29.8%だった。

当初の予想通りに、“楽器あそび”“リトミック”“音楽療法”を求める声が多かった。本幼児音楽授業でいづれも取り入れている内容である。保育現場から必要と思われた内容について項目ごとに考えてみたい。

① 楽器あそびについて

89.3%の園が、楽器あそびの必要性を訴えている。楽器指導について筆者は保育現場においては必要なことと考え、幼児音楽授業内で取り入れている。保育現場で予測される簡易楽器、音楽療法で使用している民族楽器やさまざまな楽器を取り入れている。幼児にも演奏可能なミュージックベル、トーンチャイム、ハンドベルも取り入れている。また前述した本学幼稚園教

論免許更新講習時の筆者の講義で、また他園幼稚園・保育所・認定こども園からの依頼等で講座を担当するが、その際楽器指導へのリクエストは多い。この事実から予想はしたが、比率が大きかったことから、楽器の使用について保育現場では切実なのだと実感した。筆者は講座や講習会時、簡易楽器の他に民族楽器等音楽療法で使用する楽器も紹介するのだが、簡易楽器、例えばタンブリンや、鈴、カスタネット等の使用方法や演奏方法について理解している受講者は少なく、保育者になるまでにあまり楽器奏法については学んでいないことが分かる。筆者は楽器の使用方法について時間のある限り丁寧に伝えている。保育者養成校での楽器指導については必要なことなのかもしれない。筆者は今後も幼児が楽しんで表現できる楽器、楽しんで表現遊びできる楽器について、演奏法や扱い方についてさらに研究し、継続して授業内容や依頼される講座で取り入れていきたい。

②リトミック

リトミックを取り入れる必要がある、と感じている回答が78.6%あった。リトミックについては、スイスの作曲家・音楽教育家であるエミール・ジャック・ダルクローズによって考案された音楽教育法である。畑中らはリトミックについて、リズムが音楽の最も重要な要素で、感性が育ち、リズム感が良くなり、集中力がつくと述べており¹⁵⁾、善本は子どもたちはリトミックをとおして、集中力、反射神経、思いやり、優しさ等社会で生きていくために必要な能力も身につくと述べている¹⁶⁾。確かに筆者も大学時代、修士時代にダルクローズのリトミックの指導を専門的に受けたが、反射神経やリズム感、集中力が身につく役立ったと考えている。しかし思いやり、優しさが育つということまでは確認できなかった。現在筆者の授業での導入の仕方については“リズム打ち”という形で、例えば足で拍子を取り、手でリズムを叩く、音楽に合わせて身体を動かすという内容で取り入れている。また授業内で音楽に合わせて身体表現する“歌あそび”も筆者は“リトミック”の一つとして考えている。音楽に合わせて“リズムあそびを楽しむ”という観点で導入している。もしかすると、現場の保育者たちも“リトミック”に関してリズムあそびを楽しむという感覚で導入しているのかもしれないと考えた。今後リトミックについてどのように授業や保育現場で取り入れて行くか考えていきたい。

③音楽療法

音楽療法については回答のうちの50.4%が必要としていることが分かった。本幼児音楽授業でも音楽療法について指導している。保育と音楽療法は密接に関係しているからだ。一人ひとりの子どもを細かく観察する相手に寄り添うという点が同じだからだ。音楽療法については楽器あそびと同様に、幼稚園教諭免許更新講習時や他園幼稚園・保育所・認定こども園からの“子育て支援”等での依頼の内容からもその必要性は多くなって来ている。先日開催された2018年1月17日(水)の福島市私立幼稚園協会の第3回研究部会において、「保育と音楽療法」のテーマで筆者は講座を担当した。発達の問題等悩みを抱えている園があった。現在の園での悩みは、その対象の子どもを園生活において一人に放っておく訳にはいかない。担任が対象者につききりになる場合が出て来る。担任は1クラスを集団で保育しているので、担任の精神的な負担が大きくなる。何とか集団活動させたいと思い専門家と連携を図りたいのだが、親が子どもを発達障害として認めたくない、その事実を受け入れようとならない親への対応についても苦慮しているようである。そのような時、自然な形で対象者に接近を図り浸透していく音楽療法は、保育者たちにとって興味・関心の対象となり始めたのではないか。子どもが身近に感じている音楽なら、対象の子どもたちに接近出来るかもしれないと感じているのだと思う。本学では幼児音楽の授業の他に幼稚園教諭対象の免許更新講習の講座の中にも音楽療法に関する講座を取り入れており音楽療法への理解を広めている。実際に筆者は既に報告済みだがF大学認定こども園に和太鼓指導を取り入れた。和太鼓を5歳園児に取り入れた。気になる子4名について、当初参加出来るか心配した気になる子4名について、音楽療法的要素を取り入れながら接近を図り指導した。実際太鼓の演奏に全員を参加させることが出来た¹⁶⁾。また、現在本園ではトーンチャイムを使用しているが、最も気になる子どもの一人が、トーンチャイムの時間だと積極的になり、他の園児より回数多くトーンチャイムを鳴らす。他の活動に興味関心を示さず、ほとんど集団行動に混ざらない園児がトーンチャイムに興味関心を示したのである。その体験からも音楽療法の効果を感じている。そして筆者が体験した知的障害を伴った自閉症児への音楽療法の実践結果から自閉症児Aに音楽療法を取り入れたところ、対人疎通性がみられ、自傷行為が改善され集中力を養うことが出来た¹⁷⁾。また自閉症児Bは自傷

行為の改善、情動のセルフコントロールの育成がみられた¹⁸⁾等、音楽療法による障害児への音楽療法の効果について既にも実証している。今後も音楽療法について研究しながら保育の中に取り入れて行きたいと思う。

④ミニ・ミュージカル

筆者の音楽表現能力育成のための授業「幼児音楽」にて学生の音楽表現力向上のために、後期に入るとミニ・ミュージカルを実施している。ミュージカルは総合芸術とも言われている。台本に即して、舞台美術や照明を取り入れながら、うたって踊ってお芝居するものである。筆者は2002年から2013年までの11年間保育科卒業必修科目である「総合演習Ⅱ」および「創作ミュージカル」授業の指導を担当していた。またそれ以前は、保育科第一部の行事として保育科第一部1年・2年の8クラスの指導をしていた。この他本学合唱部の発表会においてミュージカルやミュージカルに類似した合唱劇を取り入れていた。それらの指導からミュージカルは学生の演技力、表現力、創造性が高まり、音楽的能力向上に効果のあること、さらに学生同士の連帯感、協調性、信頼関係、責任感、友情の芽生えにもつながることが分かった¹⁹⁾。さらに自己発見、自己改革にもつながり、音楽表現能力にとどまらず、他分野の表現領域へも広がりを見せた²⁰⁾。そのために1年次幼児音楽授業でも取り入れている。内容については、筆者が一つの大きなテーマを決めそのタイトルに即して学生たちは現代の社会問題を取り上げ、子どもの問題に結びつけるというものである。学生たちは自分たちでサブテーマを決め、オリジナルの台本作成からはじまり、リーダー（舞台監督）、音楽、舞台美術、照明、ダンス、衣装の係を決め、練習に取り組み授業内で発表すると言うものである。学生たちは約12人を一グループにして1クラス5グループで実施する。わずか1か月半程度で仕上げる。発表が近づくと、学生たちは授業の空き時間や放課後の時間も活用して練習に取り組んでいた。今年度は発表当日本学の千葉ホールという321名収容出来る本格的なホールで実施した。学生たちは非常に真摯に取り組み、終了後お互いに感動し合っていた。この取り組みには学生同士の様々な人間模様が繰り広げられ、現代社会を生きる若者の真の姿を知ることが出来る。ミュージカルへの取り組みは、今後保育者になろうとしている学生たちに大きな効果があると考えている。音楽表現領域の授業へのミュージカル導入についての意義は大きい。

<結語>

今回の調査から、保育現場における子どもたちの怒鳴り声に対しては、自然な形で子どもたちの声域・音域に合わせ移調してうたわせることが解決策の一つであると言える。保育者へのピアノ等楽器奏法の技量が求められる。また子どものみならず学生に音楽授業にも生かされていることが分かった。次に歌唱指導の際ペープサートや絵本、紙芝居の導入等視覚的要素を取り入れることで子どもたちに歌を具体化させられること。歌に振り付け等身体表現を伴うことで強い印象づけが出来ることの要素が挙げられた。保育現場で求めている歌のジャンルは童謡・唱歌、わらべ唄が多く、わらべ唄やあそび歌の要望が多かったことが印象に残った。どの分野の音楽表現を必要としているのかについては、楽器あそび、リトミック、音楽療法、ミュージカルだった。音楽療法への要望が挙げたことが、現在の保育現場での新しい課題の一つだと感じた。以上のように保育現場での歌唱表現指導や音楽表現分野における指導内容の要望が具体化されるとともに、本学で指導している音楽表現授業内容が合致していることが分かった。今後も保育現場に定期的にも実態調査を行い、保育現場と連携を深めながら、子どもたちが、楽しく生き生きと音楽表現活動に参加出来るための研究を深めていきたい。

最後に快くご協力いただいた学生の実習先の先生方
にこの場をお借りして心からお礼申し上げたい。

<注記>

- (1) 佐藤敦子 幼児が自発的に歌をうたい出す事に関する一考察 福島女子短期大学 (現福島学院大学) 研究紀要第13集 pp.101~113 1984
- (2) 佐藤敦子 幼児の歌唱能力について 福島女子短期大学 研究紀要第14集 pp.120~137 1985
- (3) 佐藤敦子 幼児の歌の好みについて 福島女子短期大学 研究紀要第15集 pp.265~285 1986
- (4) 智原江美・鍋島惠美・和田幸子・下口美帆・田中慈子 幼稚園・保育所における表現領域の活動に対応した保育者養成教育のあり方 京都光華女子大学京都光華女子短期大学部研究紀要 第53号 2015 pp.119~134
- (5) 久保田和子 幼児の歌唱指導に必要な指導者の技術に関する考察 関東短期大学紀要 第59集 pp.51 2017

- (6) 佐藤敦子 幼児の歌唱能力について、福島女子短期大学研究紀要第14集 pp.129 1985
- (7) 久保田和子 幼児の歌唱指導に必要な指導者の技術に関する考察 関東短期大学紀要第59集 pp.54~55 2017
- (8) 水崎誠 幼児の歌唱行動研究の動向 音楽教育学44巻1号 音楽教育学 pp.26~31 2016
- (9) 智原江美・鍋島恵美・和田幸子・下口美帆・田中慈子 幼稚園・保育所における表現領域の活動に対応した保育者養成教育のあり方 京都光華女子大学京都光華女子短期大学部研究紀要第53号 2015 pp.124
- (10) 土井田千紘、鈴木慎一郎、幼児期における歌唱の導入方法に関する研究、鳥取大学教育研究論集 第6号 pp.392016
- (11) 佐藤敦子 知的障害を伴った自閉症児への音楽療法の効果について(2) 福島学院大学研究紀要 第39号 pp.73~75 2007
- (12) 松本晴子・手遊び歌と弾き歌いをどのようにうたうか、音楽教育実践ジャーナル Vol8 no.1) 日本音楽教育学会 pp.96 2010
- (13) 寺澤洋子・星(柴)玲子・柴山拓郎・大村英史・古川聖・牧野昭二・岡ノ谷一夫 身体機能の統合による音楽情動コミュニケーションモデル 特集—芸術認知科学20(1) pp.112 2013
- (14) 畑中雅英、種田葉子 リトミックが幼児に与える影響 和歌山親愛女子短期大学信愛紀要 48号 pp.25~26 2008
- (15) 善本桂子、子どものリトミック実践の現状と課題に関する研究 広島文教教育24巻 2009 pp.10
- (16) 佐藤敦子 和太鼓による幼児の音楽的表現の育成 福島学院大学教育・保育論集 pp.65~pp.73 2017
- (17) 佐藤敦子 知的障害を伴った自閉症児への音楽療法の効果について 福島学院大学研究紀要 第38集 pp.53~61 2006
- (18) 佐藤敦子 自閉症児への音楽療法の効果について(2) 福島学院大学研究紀要第41集 pp.97~P.109 2009
- (19) 佐藤敦子 音楽教育におけるミュージカルの意義について 福島女子短期大学研究紀要第19集 pp.111 1990
- (20) 佐藤敦子 合唱劇に関する一考察 福島女子短期大学研究紀要第21集 pp.213 1991

学生の身体表現が持つ特性の傾向についての検討 ～童謡からイメージする動きに着目して～

Study on Tendency of Characteristic of Student's Body Expression
-Focusing on the Movements Imaged from Nursery Rhymes-

長久保 和子
Kazuko Nagakubo

目次

はじめに

1、身体表現に関する研究について

- (1) オノマトベを用いた動きとイメージについて
- (2) オノマトベが動きを引き出すことについて
- (3) 「動きのボキャブラリー」について
- (4) 動きの種類と心の接点について

2、調査方法

3、調査結果

- (1) 選曲
- (2) 動き
- (3) 「オノマトベのうた」イメージ
- (4) 検討

おわりに

はじめに

筆者が担当する表現あそび活動の授業において、出席確認の呼名を行う際の一場面である。この日の授業は呼名後「かえるのたいそう」という音楽をかけ、準備運動を履修者全員で行う予定であり、そちらの導入として呼名の際は「かえるになって各々自由に返事をする」ことを伝えを反応観ようと即興で試みた。「今日はみんなカエルになって返事するケロよ。分かったケロか」と学生らに問いかけると、何のためらいもなく3分の2以上の学生が「分かったケロ」と答えた。「○○さん」と声をかけると「ケロ」と答える。「○○さん? …お休みケロか?」と聞くと「そうダケロ」「今日は朝からいなかっただケロね」「そうケロね」と友達同士、口々に「ケロケロ」と答えていく。普段の授業では、声が

小さく、返事をする際にはおとなしくしていた学生が、この日は「ケロ」と元気に答える。しかも、笑顔で楽しそうである。手を挙げて返事をする学生や少し間を置いてから「ケロ」と答える学生など、それぞれが工夫して返事をし、返事を待つ学生は自分の名前を聞き洩らさないよう筆者の声に耳を傾て、教室内はいつも以上に静かであった。ちょっとした「ゆさぶり」のつもりで投げかけた言葉が、学生にとっては「かえるになりきって演じ自分を表現する」といった環境につながり、結果として自信を持って返事ができたという表現活動の一コマとなった。「ケロ」という擬音語が「かえる」をイメージさせ、「返事をする」といった行為(動き)が事前に明確であったため、学生が自信を持って自分を表現できたことにつながったと考える。幼稚

園教育要領における領域「表現」の内容である「(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりする楽しさを味わう。」(表1)にもあるような身体表現活動につながる一場面となった。「ケロ」という言葉を調べてみると「(擬音語になる場合は)主にカエルの明るく高い鳴き声を表す」と記されていた¹⁾。そのような擬音語・擬声語・擬態語などを総称して「オノマトペ」と呼んでいる。古市はオノマトペの絵本について研究する中で「オノマトペはリズムの要素を持っている。こどもにとってオノマトペは快い響きとなり、身体表現を引き出す刺激となる」²⁾としている。また「オノマトペは動きを引き出すに十分な刺激であるとしても、読み手の工夫がなければ十分には伝わらない。読み手がリズムカルに表情をつけて読むことで、オノマトペの力が大きくなることを忘れてはならない。読み手が背景を十分に理解すること、その表現力を発揮することが必要としている」³⁾とも結んでいる。そこから筆者は、学生も同様、なりきって演じたり、身体を動かして自分の思いを表現したりする体験を引き出すため、オノマトペを活用することがイメージを構築する手段として有効であり、身体表現を引き出す刺激につながるのではないかと考えた。そこで、「身体表現を引き出す」とは一体どういったことなのかを考えた時、学生自身の身体表現に関する特性をつかむ必要があると考えた。学生の自由な身体表現を引き出すためには、刺激を与える以前に、そのもの自体の特質を知るべきだと考えた。

本稿では、自分で考えたことや感じたことを身体で表現することに重点を置き、授業内で自分たちが選んだ童謡の歌詞からイメージしたことを、即興で身体の動きとして表現し、どのような動きになるかを調査した。そして、そこから見えてくる学生の身体表現が持つ特性の傾向について検討している。学生の身体表現が持つ特性をさらに明確化することで、学生にふさわしい表現指導法と授業内容の再検討に役立てたいと考えた。

キーワード：身体表現、学生の身体表現が持つ傾向と特性、オノマトペ

語義規定

本稿における「身体表現」とは、幼稚園教育要領(平成29年告示)第2章⁴⁾ねらい及び内容「表現」における

「感じたことや考えたことを動きで表現したり、演じて遊んだりするあそびや活動」を示す。

幼稚園教育要領における領域「表現」のねらい・内容をまとめると表1のようになる。

1、身体表現に関する研究について

ここではこれまでに行われた身体表現に関する研究や文献のうち主なものをみていく。

(1) オノマトペを用いた動きとイメージについて

下釜⁵⁾は「これまでの研究において、幼児の身体表現活動を引き出すためには、指導者の言葉かけが重要であると示唆している。その指導者の言葉かけの中で、動きとイメージを結びつける言葉として擬音語・擬態語・擬声語(オノマトペ)が使われることが多い。オノマトペは物事の声や音・様子・動作・感情などを簡略的に表し、情景をより感情的に表現させることの出来る手段として用いられており、語彙力が十分でない幼児においても直感的に捉えたイメージを表現でき、大人とほぼ同じイメージを持つことができる。九州体育・スポーツ学会第59回大会において、5歳児幼児1人ずつを対象に、オノマトペ(ピョンピョン・クルクル・コロコロ・プーンプーン)を用いて幼児の動きとイメージについて調査研究を行い報告した。その結果では、「ピョンピョン」は「跳ぶ」動きであり、イメージされた題材は「ウサギ」「カエル」が大半を占めていた。「クルクル」では、「まわる」動きが最も多く、イメージは27種類と多岐にわたっていた。「コロコロ」では、「横転」の動きが最も多く、次いで「前転」であった。イメージは「ダンゴムシ」「ドングリ」「ボール」が上位を占めていた。「プーンプーン」では手で表現して動く動作が最も多くみられ、イメージは16種類であり「ハチ」が最も多かった」としている。

(2) オノマトペが動きを引き出すことについて

古市⁶⁾は、こどもの動きを引き出すオノマトペ絵本の研究において「身体表現はイメージができると、表現するのは安易になるので、イメージを広げるオノマトペは身体表現に良い刺激となる」「身体表現の第一歩は、動き始めることであるが、ここを乗り越えないために身体表現に入っていけないこどもがいる。また、最初に戸惑いを見せるこどもが少なからずいる。この地点を“身体表現の壁”と呼ぶことにする。身体表現は最初の手足を動かす動作ができるかできないかが、分かれ目になる。動きに容易に導くことで、さらに、自分

で想像してイメージを發展させていくことへの動機付けになる」とまとめており、イメージやオノマトペが身体表現を引き出しやすくしていることが分かる。

(3) 「動きのボキャブラリー」について

高野⁷⁾は「動きの表現性要素である「時間性」「力性」「空間性」を考えることによって、動きの質を選び出し、表現することが簡単になります」とし「身体表現あそびでは多種多様な動きを用いて表現することで、運動能力の発達を促しているのです。言葉での表現の場合、多くのボキャブラリーがないと、思いを的確に表現できません。英作文がなかなかむずかしいのは、文法だけでなく、語彙の少ないことも起因するでしょう。身体表現でも媒体となる“動きのボキャブラリー”が少ないと自分の思いを表現することは、言葉と同様にやはりむずかしいでしょう」「豊かな創作的身体表現を展開するためには、身体表現あそびで多様な動きの経験を子どもたちと一緒に楽しく取り組んでいくことが鍵となります。また、子どもの動きをしっかり見て、

認めて、それを模倣して子どもに返す、動きのキャッチボールがとても重要となります。設定保育や子育て支援の活動において、子どもが創造した動きを大人（保育者や保護者）が模倣することによって、子どもの創造的な表現活動が活性化していきます」と述べている。

(4) 動きの種類と心の接点について

古市は、各動きの持つ意味と心のどの部分と関係しているのかなどについて以下のようにまとめている。

- ①あるく 動くことの基本。あるく遅速や強弱によってあらゆる表現を可能にする⁸⁾。
- ②はしる あるく動きの速度が速まったもの。はやる気持ちが足の回転の速さになって現れる⁹⁾。
- ③とぶ 大地からの離脱の意味と同時に、大空への飛翔を意味。全身を空間に投げ出す最も力動的な表現で、この極限の動きが子どもの心を解放する。違う時空間へいけることであり、子どもの夢へとつながる表現¹⁰⁾。
- ④まわる 子どもの表現はもののまわる様子を回転で

表 1

表 現	感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。
ね ら い	(1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性を持つ。
	(2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
	(3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。
内 容	(1) 生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気づいたり、楽しんだりする。
	(2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
	(3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
	(4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。
	(5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
	(6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。
	(7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりする。
	(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりする楽しさを味わう。
内 容 の 取 扱 い	(1) 豊かな感性は、自然などの身近な環境と十分にかかわる中で美しいもの、優れたもの、心を動かす出来事などに出会い、そこから得た感動を他の幼児や教師と共有し、様々な表現することなどを通して養われるようにすること。
	(2) 幼児の自己表現は素朴な形で行われることが多いので、教師はそのような表現を受容し、幼児自身の表現しようとする意欲を受け止めて、幼児が生活の中で幼児らしい様々な表現を楽しむことができるようにすること。
	(3) 生活経験や発達に応じ、自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるように、遊具や用具などを整えたり、他の幼児の表現に触れられるよう配慮したりし、表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること。

(文部科学省「幼稚園教育要領」第2章から抜粋)

表し、体感によって確かめようとする。まわる支点を自分自身に置く場合と対象に置く場合がある。常に相手を認識し、かつ、相手の位置を認知して自分の視点を修正していく必要がある¹¹⁾。

- ⑤つなぐ 「ふれる」ことが続くこと。それを続けることは、もっと強い信頼の現れとなる¹²⁾。
- ⑥たたく 心の外攻的な行為。子どもは過激な心の表現としてたたく。怒りを外へ出すときは強くとたく。たとく行為は大人の注目を集め、まわりの関心を向けさせる迫力がある。振り向いてほしいときの「たたく」は優しい。アンコールの拍手の大きさは感動の大きさであり、まさしく心の表現¹³⁾。
- ⑦ゆれる 心の揺れ、周囲の状況をそのまま表現。「ゆれる」動きは振りの原点。大きく振ると規則的、細かく見ると、まったく同じでない繰り返しがある。それは美や安らかさ、心地よさに通じる。身体の力を抜いていることが必要。脱力できることは、表現では最も高度な技術であり、「ゆれる」表現はゆとりの心を育てる¹⁴⁾。
- ⑧のびる 全身を伸ばすことで自己の限界への挑戦をし、さらなる可能性を試みるもの。願望の表現。上下に変化する方向性がある。2、3人とつながることで表現できる。心が動き、少しずつ高まっていく様子も表現できる¹⁵⁾。
- ⑨おす・ひく 意思を表現しやすい行為。身体と周囲との直接対話。明確な意思を表現¹⁶⁾。
〔「保育者養成のためのテキスト身体表現」⁸⁾より筆者が抜粋〕

2、調査方法

- 期間：2017年9月4日（月）・6日（水）
- 対象：保育学科1年生授業「特別研究Ⅱ（保育者の表現遊び）」履修者 57名
Aクラス27名：4日（月）
Bクラス30名：6日（水）
- 方法：【①、②は前回の授業時に行う】
- ①1グループ5～6人程度で10グループ作る
- ②各グループ「どうよう&あそびうたぎゅぎゅっと！100うた」（コロムビアミュージックエンターテイメント）から好きな童謡1曲を決める（表2）

- ③グループで童謡から連想する物語などをイメージし、即興で動きを創作する。

（創作時間 30分間）

- ④音楽に合わせて自分たちの作った動きを見せ合う
※ダンスを行う方が保育者、見ている方は子ども役として導入からまとめまで言葉かけなどを考え、模擬保育を行う
※千葉記念ホールで行い、保育者役はステージ上で行う
- ⑤模擬保育の様子をVTRに記録する
※履修者には授業開始時に予め状況を説明し、了承を得た上で行う
- ⑥最後にグループごと「ピタゴラスイッチうたのCD」（ワーナーミュージック・ジャパン）から“オノマトベのうた”の歌詞（表3）について、イメージしたことやどのような動きが良いなど話し合う

表3

“オノマトベのうた”（作詞/内藤真澄・うみ田みお 作曲・うた/栗原正己）	
ゴロゴゴゴゴロ	トントントントン エヘントコトコトコ
ガラガラガラガラ	ニャア～
スッテン！	ヒリヒリヒリ ひよこひよこひよこ ぐう～
ポーンポーンポーン	
スタスタスタスタ	スットン カラカラカラ ピンポーン タツタツタツタツ
ガチャ コケー！	ドタドタ コケー！ドタドタドタ コケコッ キキョッ！
ドッシーン	
ガラガラガラガッシャン	ピッポコビーのベンベン

〔ピタゴラスイッチうたのCD（ワーナーミュージック・ジャパン）〕⑤より

3、調査結果

（1）選曲

学生には前の週での授業でグループ分けと選曲をしてもらい、話し合う時間を設けた。Aクラス5チーム、Bクラス5チームで話し合いを行った。学生がチームごと決めた曲は以下のとおりである（表4）。

表4

グループ	A	B
G 1	ごひきのこふたとチャールストン	おおきなくりのきのしたで
G 2	ももたろう	ふしぎなポケット
G 3	やきいもグーチーパー	ごひきのこふたとチャールストン
G 4	キラキラぼし	ももたろう
G 5	グーチョキパーでなつくろう	パンダうさぎコアラ

〔どうよう&あそびうた んぎゅぎゅっと！100うた（コロムビアミュージックエンターテイメント）〕歌詞カードから筆者が作成

今回の調査では、学生の身体表現活動（身体の動き）に着目しているため、履修者全員が考え動くよう指導

表2

【曲目】	Disc - 1	Disc - 2	Disc - 3	Disc - 4
1	いぬのおまわりさん	アイアイ	おおきなくりのきのしたで	サッチャン
2	ぞうさん	とんでったバナナ	どんぐりころころ	やぎさんゆうびん
3	あひるのぎょうれつ	おぼけなんてないさ	あさいちばんはやいのは	コンコンクシャンのうた
4	おうま	アイスクリームのうた	とんとんとんとんひげじいさん	ごひきのこぶたと チャールストン
5	むすんでひらいて	おふろジャブジャブ	もりのくまさん	おすもうくまちゃん
6	あたまかたひざボン	おさるがふねをかきました	マーチング・マーチ	こぶたぬきつねこ
7	チューリップ	ツッピンとびうお	きのこ	たまごとにわとり
8	ちょうちょう	うみ	おへそ	あらどこだ
9	おはながわらった	とんぼのめがね	やまでらのおしょうさん	しあわせなら手をたたこう
10	はと	めだかのがっこう	しょうじょうじのたぬきばやし	てをつなごう
11	ぶんぶんぶん	おんまはみんな	やまのおんがくか	とんとんともだち
12	やまのワルツ	おつかいありさん	おもちゃのチャチャチャ	ドロップスのうた
13	せんせいとおともだち	かわいいかくれんぼ	クラリネットをこわしちゃった	やきいもグーチーパー
14	おべんとう	げんこつやまのたぬきさん	おおきなたいこ	あんたがたどこさ
15	パンダうさぎコアラ	かえるのうた	ふしぎなポケット	おてらのおしょうさん～平成版
16	こいのぼり	きりんさん	おさるのかごや	ずいずいずっころばし
17	おかあさん	おなかのへるうた	まつぼっくり	うさぎとかめ
18	おはなしゆびさん	カレーライスのうた	きしゃぼっぼ	ももたろう
19	グーチーパーでな につくろう	おべんとうばこのうた	くつがなる	おしょうがつ
20	いとまきのうた	おにぎりころりん	ゆうがたのおかあさん	ゆき
21	あめふり	トマト	つき	たきび
22	かたつむり	きんぎょのひるね	ちいさいあきみつけた	しゃぼんだま
23	あめふりくまのこ	ゆうやけこやけ	むしのこえ	りんごのひとりごと
24	おおきなふるどけい	なみとかいがら	つきのさばく	うれしいひなまつり
25	たなばたさま	ゆりかごのうた	キラキラぼし	あわてとこや

「どうよう&あそびうた ぎゅぎゅっと! 100うた (コロンビアミュージックエンターテイメント)」 歌詞カードから筆者が作成

表5-1

“ごひきのこぶたとチャールストン” (訳詞/漣健児 作曲/モーガン&マルキン 編曲/越部信義 うた/森みゆき)				
ごひきのこぶたが	ごひきのこぶたが	ラジオをきくと	いつも	ブーブーうたって チャールストン
ごひきのこぶたが	ごひきのこぶたが	じゃれあうと	まるで	リズムにあわせて チャールストン
ごひきのこぶたが	ごひきのこぶたが	ななかよしで	いつも	ダンスをするのは チャールストン
ごひきのこぶたが	ごひきのこぶたが	けんかをして	すぐに	なかよくなるの チャールストン
ごひきのこぶたのおなまえは	チャーに	ヤーちゃん	ルーぼう	それに スーちゃん トンきち
みんなの	なまえをだせば	ホラ	チャールストン	
ごひきのこぶたが	ごひきのこぶたが	ラジオをきくと	ママも	きどっておどるの チャールストン
ごひきのこぶたが	ごひきのこぶたが	じゃれあうと	パパも	うかれたすの チャールストン
ごひきのこぶたが	ごひきのこぶたが	ななかよしで	いつも	ダンスをするのは チャールストン
ごひきのこぶたが	ごひきのこぶたが	ひるねをして	ゆめで	おどりだす チャールストン

「どうよう&あそびうた ぎゅぎゅっと! 100うた (コロンビアミュージックエンターテイメント)」
歌詞カード Disc3 & 4④から筆者が作成

表5-2

“ももたろう” (文部省唱歌 作曲/岡野貞一 編曲/若松正司 うた/小林千恵、森の木児童合唱団)	
ももたろうさん ももたろうさん おこしにつけたきびだんご ひとつわたしにくださいな やりましょう やりましょう これからおにのせいばつに ついてゆくなりましょう いきましょう いきましょう あなたについてどこまでも けらいになっていきましょう そりやすすめ そりやすすめ いちどにせめてせめやぶり つぶしてしまえおにがしま おもしろい おもしろい のこらずおにをせめふせて ぶんどりものをえんやらや ばんばんざい ばんばんざい おどものいぬやさるきじは いさんでくるまをえんやらや	
「どうよう&あそびうた ズィヅィゥット!100うた (コロンビアミュージックエンターテイメント)」 歌詞カード Disc 3 & 4 ㊟から筆者が作成	

表5-3

“キラキラほし” (フランス民謡 訳詞/武鹿悦子 編曲/小森昭宏 うた/山野さと子、森の木児童合唱団)	
きらきらひかる おそらのほしよ まばたきしては みんなをみてる きらきらひかる おそらのほしよ きらきらひかる おそらのほしよ みんなのうたが とどくといいな きらきらひかる おそらのほしよ	
「どうよう&あそびうた ズィヅィゥット!100うた (コロンビアミュージックエンターテイメント)」 歌詞カード Disc 3 & 4 ㊟から筆者が作成	

表6

“動きの種類” ①あるく ②はしる ③とぶ ④まわる ⑤つなぐ ⑥たたく ⑦ゆれる ⑧のびる ⑨おす・ひく
「保育者養成のためのテキスト身体表現 目次」より筆者が作成

した。そのため、音源はCDで行うこととした。

AG1、BG3で選ばれていた「ごひきのこぶたとチャールストン」、AG2、BG4で選ばれた「ももたろう」、AG3で選ばれた「キラキラほし」の歌詞を表5-1、表5-2、表5-3に表す。

今回の調査では、AG1・BG3が選んだ「ごひきのこぶたとチャールストン」、BG4「ももたろう」、AG4「キラキラほし」の構成と動きに着目し、選曲理由とイメージの仕方の関連性や動きのバリエーションについて、また、やりにくさや盛り上がり方を検討することとした。

(2) 動き

それぞれの構成をみていくこととする。なお、「身体表現に関する研究について」(4)で述べた古市による「動きの種類」^{8)~16)}を参考に表6とし、学生たちが作った動きの種類を表7~表10としてまとめ、検討している。

【AG1:「ごひきのこぶたとチャールストン」構成】

- I:「ごひきのこぶたが ごひきのこぶたが ラジオをきくと」(図1-1)
「いつも ブーブーうたって チャールストン」(図1-2、図-3)



図1-1



図1-3



図1-2

- II:「ごひきのこぶたが ごひきのこぶたが じゃれあうと まるで リズムにあわせて チャールストン」…Iと同じ動きで反対バージョン
III:「だって ごひきのこぶたは なかよしで いつも ダンスをするのはチャールストン」(図2)



図 2

IV : 「ごひきのこぶたが ごひきのこぶたが けんかをしても すぐに なかよくなるの」… I と同じ動き

V : 「チャールストン」ポーズ (図 3)



図 3

表 7

“AG1 : 動きの種類”

- 図 1 : ①あるく ③とぶ ④まわる
⑥たたく ⑦ゆれる
⑧のびる ⑨おす・ひく
- 図 2 : ①あるく ③とぶ ④まわる
⑤つなく ⑥たたく ⑦ゆれる
⑧のびる ⑨おす・ひく
- 図 3 : ⑧のびる ⑨おす・ひく

「保育者養成のためのテキスト身体表現」をもとに筆者が作成

【BG3 : 「ごひきのこぶたとチャールストン」構成】

I : 「ごひきのこぶたが ごひきのこぶたが ラジオをきくと」(図 4-1) …AG1 図 1-1 と同じ動き

「いつも ブーブーうたって チャールストン」(図 4-2)



図 4-1



図 4-2

II : 「ごひきのこぶたが ごひきのこぶたが」(図 5-1) 「じゃれあうと」(図 5-2) 「まるで リズムにあわせて チャールストン」(図 5-3)



図 5-1



図 5-2



図 5-3

III : 「だって ごひきのこぶたは なかよしで」(図 6-1)

「いつも ダンスをするのは」(図 6-2)

「チャールストン」(図 6-3)



図 6-1



図6-2



図6-3

IV:「ごひきのこぶたが ごひきのこぶたが けんかをしても すぐに なかよくなるの チャールストン」(図7-1、図7-2) …この後も、同様の動きを繰り返す



図7-1



図7-2

V: ポーズ (図8)

図8



表8

“BG3:動きの種類”

- 図4:①あるく ③とぶ ④まわる ⑧のびる ⑨おす・ひく
 図5:①あるく ③とぶ ④まわる ⑤つなく ⑦ゆれる
 ①のびる ⑨おす・ひく
 図6:①あるく ⑤つなく ④まわる ⑦ゆれる ⑧のびる
 ②おす・ひく
 図7:①あるく ③とぶ ④まわる ⑧のびる ⑨おす・ひく
 図8:⑤つなく ⑧のびる ⑨おす・ひく

「保育者養成のためのテキスト身体表現」をもとに筆者が作成

【BG4:「ももたろう」構成】

I:「ももたろうさん ももたろうさん おこしにつけたきびだんご ひとつわたしにくださいな」(図9)



図9

II:「やりましょう やりましょう これからおにのせいばつについてゆくならやりましょう」(図10-1、図10-2)



図10-1



図10-2

Ⅲ：「いきましょう いきましょう あなたについて
どこまでもけらいになっていきましょう」
(図11-1、図11-2、図11-3)



図11-1



図11-2



図11-3

Ⅳ：「そりやすすめ そりやすすめ いちどにせめて
せめやぶりつぶしてしまえおにがしま」
(図12-1、図12-2)



図12-1



図12-2

Ⅴ：「おもしろい おもしろい のこらずおにをせめ
ふせてぶんどりものをえんやらや」
(図13-1、図13-2)



図13-1



図13-2

Ⅵ：「ばんばんざい ばんばんざい おとものいぬや
さるきはいさんでくるまをえんやらや」
(図14-1、図14-2)



図14-1



図14-2

表9

“BG4：動きの種類”

図9：①あるく ⑤つなぐ ⑧のびる

図10：①あるく ④まわる ⑧のびる

図11：①あるく ④まわる ⑦ゆれる ⑧のびる

図12：①あるく ②はしる ④まわる ⑦ゆれる ⑧のびる

図13：①あるく ②はしる ③とぶ ④まわる ⑥たたく ⑧のびる ⑨おす・ひく

図14：①あるく ②はしる ③とぶ ④まわる ⑥たたく ⑧のびる ⑨おす・ひく

【保育者養成のためのテキスト身体表現】をもとに筆者が作成

【AG4：「キラキラぼし」構成】

Ⅰ：「きらきらひかる おそらのほしよ」(図15-1、
図15-2)



図15-1



図15-2

Ⅱ：「まばたきしては みんなをみてる」(図16-1、
図16-2)「きらきらひかる おそらのほしよ」



図16-1



図16-2

- Ⅲ：「きらきらひかる おそらのほしよ」（図15-1、
図17-1）
「みんなのうたが とどくといいな」（図17-2）



図17-1



図17-2

- Ⅳ：「きらきらひかる おそらのほしよ」（図18）

図18



表10

"AG4：動きの種類"	
図15：①あるく ⑦ゆれる ⑧のびる ⑨おす・ひく	
図16：⑦ゆれる ⑧のびる ⑨おす・ひく	
図17：①あるく ⑦ゆれる ⑧のびる ⑨おす・ひく	
図18：⑤つなぐ ⑧のびる ⑨おす・ひく	

〔保育者養成のためのテキスト身体表現〕をもとに筆者が作成

(3) 「オノマトベのうた」イメージ

- ① グループの発表後、オノマトベについて指導
※歌詞は以下のようにⅠ～Ⅴに分けた（表11）
- ② “オノマトベのうた”の歌詞からイメージしたことや物語について、また、どのような動きが歌詞に合うかなど、20分程度グループごと自由に話し合う
- ③ グループごとイメージした言葉や動きを資料に

記入し（表12）、最後に、話し合いを行って、難しかった点などについても意見をまとめる

【イメージしたことや物語について、また、どのような動きが歌詞に合うかなどを考える上で、難しいと思ったこと】

- イメージはできたが、動きがパターン化してしまい、考えつかなかった。
- 鳴き声を動きで表現することが難しかった。
- 一つのイメージはできるが、一つの擬音語から色々なイメージを見つけることが難しかった。
- 動きのイメージもできたが、実際に動いてみると動けなかった。
- みんなで一つの踊りを考え、表現することが難しかった。
- 動きをイメージすることが難しい。 など

以上の調査結果から、学生の身体表現が持つ特性の傾向について検討する。

(4) 検 討

① 選曲について

A・Bクラスで選ばれていた「ごひきのこぶたとチャールストン」「ももたろう」については、興味深いところである。2曲の歌詞をみると、オノマトベが使用されているのは「ごひきのこぶたとチャールストン」での「ブーブー」のみである。これまでの研究で述べたように、下釜の研究では「幼児の身体表現活動を引き出すためには、指導者の言葉かけが重要であると示唆している。動きとイメージを結びつける言葉として擬音語・擬態語・擬声語（オノマトベ）が使われることが多い⁵⁾とされていたが、オノマトベが含まれた曲ではないことから、対象が幼児ではなく、学生の場合、（指導者の言葉かけがなく、学生が自主的に選んだ環境での調査ではあったが）動きのイメージとしてオノマトベを活用しているということは、今回の調査では見受けられなかった。この曲を選択した学生に、100曲の童謡からなぜこの曲を選んだかについて、学生に尋ねた際「リズムが軽快」「ストーリー性」といった意見が挙げられた。この「ストーリー性」に着目したい。2曲について歌詞をみていくと登場人物がはっきりとしていることが分かる。「ごひきのこぶたとチャールストン」では、チーこ、ヤーちゃん、ルーぼう、スーちゃん、トンきちの5匹のこぶたが、ラジオを聴いたり歌

表11

“オノマトペのうた” (作詞/内藤真澄・うみ田みお 作曲・うた/栗原正己)	
I	ゴロゴロゴロゴロ トンカトントントン エッヘン
II	トコトコトコ ガラガラガラガラ ニャァ〜 スッテン! ヒリヒリヒリ
III	ひょこひょこひょこ ぐう〜 ポーンポーンポーン スタスタスタスタ スットン
IV	カラカラカラ ピンポーン タッタッタッタ ガチャ コケー! ドタドタ コケー! ドタドタドタ コケコッ
V	キキーツ! ドッシェン ガラガラガラガッシャ ippocoピーのペンペン

「ピタゴラスイッチうたのCD」⑥の歌詞をもとに筆者が作成

【グループでまとめたこと】

表12

歌詞 I ゴロゴロゴロゴロ トンカトントントン エッヘン		
グループ	A	B
G 1	床でゴロゴロしていたらドアをノックする人がいて それは社長だった	雷 釘を打っている音 自信のある顔
G 2	雷 とんかち できたー!	丸太を転がす とんかち 家ができた!
G 3	積み木転がす 組み立てる いばる	タイヤつきのもの運ぶ かなづち・楽器・積み木 どうだ! 自慢気
G 4	雷・大きい岩・休日の父 とんかち・ドアノック 社長・偉そう	雷・お腹の音・台車で運ぶ音 かなづち・何かを作っている 誇らしげな姿・自慢
G 5	雷 太鼓 自慢	雷 組み立てる 自信のある顔

歌詞 II トコトコトコ ガラガラガラガラ ニャァ〜 スッテン! ヒリヒリヒリ		
グループ	A	B
G 1	逃げて シャッターを閉めると 猫が挟まってニャー 鳴き声に驚いて転んだ 猫も人もヒリヒリヒリ	歩いている ふすまを開ける 猫 転ぶ おしりがいたい
G 2	足音 扉 猫が驚く しりもち おしりいたい	猫 家の中 ニャー びっくり! 転んで おしりを打って いててて
G 3	歩く 窓開ける 猫がいる 転ぶ いてー!	歩いている エサ入れにエサを入れる 猫来る こぼれたエサを踏んで転ぶ おしりイタイイタイ
G 4	歩くひよこ・鍋が沸騰 うがい・シャッター・扉 猫 転ぶ 痛い・熱い	歩く音 扉を開ける・台車で運ぶ 猫 転んだ・滑った 痛む
G 5	歩く 扉開ける 猫 猫が転ぶ いてー!	歩く 引き戸を開ける 猫 転ぶ 痛い

歌詞 III ひょこひょこひょこ ぐう〜 ポーンポーンポーン スタスタスタスタ スットン		
グループ	A	B
G 1	怪我をして片足で歩く うまいね ほめたのは太ったおばあさん 服を脱ぐ はだか	ひよこ お腹 時計 走る 転ぶ
G 2	歩く お腹すいた 鐘の音 歩く 穴に落ちた	鶏 お腹がすいていて 家から音が聞こえた (料理を作る音) 鶏 家の方に走る 到着
G 3	スキップする お腹 15時の時計音 はや歩き 座る	ゆっくり歩く お腹がなる お昼の時計が鳴る 食事するためにはや歩き 椅子に座る
G 4	こどもが歩く お腹すいた 鐘 はや歩き 落ちる・切る	誰かが登場する・歩くテンポは遅い お腹の音 12時かな・時計 誰かが歩いてきた 座った
G 5	人が歩いている 腹減ったな 時計なるやん 歩いて 座る	気軽に移動する お腹すいた 時計 はや歩き 落ちる

歌詞 IV カラカラカラ ピンポーン タッタッタッタ ガチャ コケー！ ドタドタ コケー！ ドタドタドタコケコッ		
グループ	A	B
G 1	はだかのおばあさん のどがカラカラになって 卓球を始めたったったった おばあさんが転んで 走って 転んで 走って走って 転んで	戸を開ける インターホン 店員さんが来る ドアを開ける 鶏が出てくる 鶏が驚いて逃げ回る
G 2	インターホン 足音 扉あけた 鶏が出てきた 足音 鶏の声 足音 鶏の声	家から音が聞こえてきた(料理の音) ピンポン押す 中から人が出てくる あける 鶏 食べ物をめぐって家の中を駆け巡る
G 3	氷まぜる 誰か来た 走る 開けると 鶏が来た(おはよう) 驚き逃げる 鶏が追って来た(待てー！) もっと逃げる 追いかける鶏(何で逃げるの?)	荷物をひいている・食事の準備 玄関のインターホン 走っている ドアノブをまわす 鶏が鳴いている 走っている 鶏が鳴いている とても走っている 鶏が鳴いている
G 4	ベル チャイム 転ぶ 開ける 鶏 重く走る 転ぶ 落ちる	鐘の音・引き戸 誰かが来た・呼出音 走っている ドアを開けた 鶏の鳴き声・転んだ 集まってくる様子 鶏の鳴き声・転んだ 次々と集まってくる様子 鳴き声止んだ
G 5	扉 インターホン どちら様ですか？ 開けた 鶏やん 鶏が逃げる(追いかける)	のどが渴いた インターホン正解！ 走る ドア 鶏 全速力で走る 鶏 全速力で走る 鶏

歌詞 V キキーッ！ ドッシーン ガラガラガラガッシャン ピッポコピーのペンペン		
グループ	A	B
G 1	警察が到着 車と衝突 車がべっしょんこ	急ブレーキ ぶつかる 柵から皿がおちる おわり
G 2	急ブレーキ ぶつかって 色々なところにぶつかった 頭を打っておかしくなった	ストップ 猫が急にテーブルの下から出てきて驚く鶏と人がテー ブルをひっくり返した せっかく作った料理が…残念
G 3	急ブレーキ 積み木にぶつかる 積み木が倒れる ま、しょうがねーな	物があったから止まろうとする ぶつかる 楽器・積み木が崩れる おしりをたたく
G 4	止まる・叫ぶ・サル ぶつかる ガラス割れる 話の終わりおしりペンペン	急ブレーキ・おさるさん 衝突・足音 何かが壊れる・崩れる音 おしまいの言葉 おしりペンペン
G 5	ブレーキかけ 止まらない！ぶつかる！ううー！ Good bye	急ブレーキ 事故 破壊者 おちゃらけ

〔ピタゴラスイッチうたのCD〕⑤の歌詞からイメージして学生が作成した資料をもとに筆者が作成

を歌ったり、じゃれあったりしている。仲が良く、けんかをしてもすぐに仲良くなり、その様子をママとパパが微笑ましく見守っている。5匹は本当に仲良しで、夢の中でも一緒に踊っている。といった物語を軽快なリズムのパターンを繰り返すことでさらにストーリー性を強めている。「ももたろう」では、けらいとなる者たちが順々にももたろうと出会い、鬼退治に行く様子を「やりましょう」「いきましょう」「すすめ」「おもしろい」「ばんばんざい」とパターン化されたリズムでテンポ良く物語を伝えている。古市のこどもの動きを引き出す研究にもあったように「身体表現はイメージができると、表現するのは安易になる」「身体表現の第一

歩は、動き始めることであるが、ここを乗り切れないために身体表現に入っていけないこどもがいる。また、最初に戸惑いを見せるこどもが少なからずいる。この地点を“身体表現の壁”と呼ぶことにする。身体表現は最初の手足を動かす動作ができるかできないかが、分かれ目になる。動きに容易に導くことで、さらに、自分で想像してイメージを発展させていくことへの動機付けになる⁶⁾と述べていたが、動きを引き出す場合、この「ストーリー性」は学生たちにとって重要視される点であることが分かり、またストーリー性があることによってイメージが生まれやすくなり、学生自身が主体的に動き始めることを可能としていることがうけ

がえる。それは、古市の言う「身体表現の壁」⁶⁾を学生自身で越えたことにつながるのだろう。

② 動き方について

今回調査結果にあげた4つのグループがそれぞれに作った動き（構成）をみると、AG1・BG3の「ごひきのこぶたとチャールストン」では、同じ歌詞の場面で、同じ動き方をしている（図1-1、図4-1）

また「なかよし」という歌詞の場面では「くつつく」といった動きを、2グループともほぼ同じ動きでおこなっており興味深かった（図2、図6-1）。「なかよし」は「つながる」という動きのイメージだと分かる。2グループとも、自然と顔を見合わせて笑顔で踊る場面が多かった。さらに最後の動きは、2グループとも「手を伸ばす」動きであり、皆で集まってポーズをとっている（図3、図8）。動きの種類をみると、BG3の方が比較的、動きのパターンが多いようであった。AG1、BG3とも「はしる」動きが全くなかった。

BG4の「ももたろう」は、もう1グループの選曲していたが、2グループとも構成が似ていたため、BG4を調査に選んだ。構成が似ていたというのは、配置や動き方が似ていたということである。こちらも興味深い点ではあるが、今回の調査目的を重視し、今後の研究材料としたい。BG4の「ももたろう」は、けらいとなる動物たちが、ももたろうの後ろについて鬼退治に行くといった歌詞に忠実な動きをしているが分かる。ももたろうの後ろで新しい仲間がどのような相手なのか、興味深そうにのぞく様子が見受けられ（図11-2、図12-2）、学生なりの役柄に対するイメージ、つまりは演技方が明確になっていることが分かる。後半に向けて、鬼と戦う場面があったことや登場人物が多くなるにつれ、動きの種類が多様になっている。比較的「つなぐ」動きが乏しいようであった。AG4の「キラキラほし」は、上半身の揺れと手の動きが多く、「あるく」「はしる」「とぶ」といった足の動きが乏しかった。最後の動きでは、皆で星形を手で作し、他の学生から歓声があがった（図18）。両手の指を使ったという発想やこども役の学生側へ見やすい角度を変えて動きを考えられた感性が興味深い。

古市がこれまでの研究において動きの種類と心の接点について挙げた9項目^{5)~16)}と照らし合わせると、今回の調査では「②はしる ⑥たたく」といった動きをイメージすることが学生たちにとって難しいことが分かった。またそれは、高野の言う“動きのボキャブラリー”⁷⁾

が乏しいという点にもつながり、興味深いところとなった。高野がこれまでの研究で「豊かな創作的身体表現を展開するためには、身体表現あそびで多様な動きの経験を子どもたちと一緒に楽しく取り組んでいくことが鍵となります。また、子どもの動きをしっかりと見て、認めて、それを模倣して子どもに返す、動きのキャッチボールがとても重要となります。設定保育や子育て支援の活動において、子どもが創造した動きを大人（保育者や保護者）が模倣することによって、子どもの創造的な表現活動が活性化していきます」⁷⁾と述べているように、指導者側が「のぞく」という些細な動きを見逃さずすくいあげ、指導者自身がその場で学生とともに物語の中に入り、動きをイメージしていくことが大事であると分かった。

③ 「オノマトペ」へのイメージについて

「オノマトペのうた」に関しては、学生たちそれぞれ、言葉に対し自由に発想していたことが分かる。

ここで興味深いのは、AG1・BG3・BG4・AG4のイメージした内容である。AG1は「床でゴロゴロしていたらドアをノックする人がいてそれは社長だった。逃げてシャッターを閉めると、猫が挟まってニャー、鳴き声に驚いて転んだ。猫も人もヒリヒリヒリ。怪我をして片足で歩く、うまいね。ほめたのは太ったおばあさん。服を脱ぐ、はだかはだかのおばあさん。のどがカラカラになって、卓球を始めたったったった。おばあさんが転んで、走って、転んで。走って走って、転んで。警察が到着、車と衝突、車がぺっしょんこ」と、なんとも奇想天外である。BG3は「タイヤつきのもの運ぶ。かなづち・楽器・積み木、どうだ！自慢気。歩いている。エサ入れにエサを入れる。猫来る。こぼれたエサを踏んで転ぶ、おしりイタイイタイ。ゆっくり歩く、お腹がなる、お昼の時計が鳴る。食事するためにはや歩き、椅子に座る。荷物をひいている（食事の準備）。玄関のインターホン、走っている。ドアノブをまわす、鶏が鳴っている。走っている、鶏が鳴っている。とても走っている、鶏が鳴っている。物があつたから止まろうとする。ぶつかる。楽器・積み木が崩れる。おしりをたたく」、BG4は「雷・お腹の音・台車で運ぶ音。かなづち・何かを作っている。誇らしげな姿・自慢歩く音、扉を開ける・台車で運ぶ。猫、転んだ・滑った、痛む。誰が登場する・歩くテンポは遅い。お腹の音、12時かな・時計。誰かが歩いてきた。座った。鐘の音・引き戸、誰かが来た・呼出音。走ってい

る。ドアを開けた。鶏の鳴き声・転んだ、集まってくる様子。鶏の鳴き声・転んだ、次々と集まってくる様子。

鳴き声止んだ。急ブレーキ・おさるさん。衝突・足音、何かが壊れる・崩れる音。おしまいの言葉、おしりペンペン」、AG4は「雷・大きい岩・休日の父。とんかち・ドアノック。社長・偉そう。歩くひよこ・鍋が沸騰。うがい・シャッター・扉、猫、転ぶ、痛い・熱い。こどもが歩く、お腹すいた、鐘。はや歩き、落ちる・切るベル、チャイム、転ぶ、開ける、鶏。重く走る、転ぶ、落ちる。止まる・叫ぶ・サル。ぶつかる、ガラス割れる。話の終わりおしりペンペン」である。どのグループも発想が豊かで、ストーリー性があり、内容の具体性が感じられた。何度読んでも、その都度、読み手の内容に対する印象が変わり、想像を掻き立てられる。内容の良し悪しではなく、学生本人が持つ発想力や想像力に驚かされた。動きを作る上で、ストーリー性が重要である上、そのストーリー性をキャッチする学生の受け皿が必要であることがさらに分かった。

イメージすることの話し合いに重きを置いたためか、今回、イメージからどのような動きが考えられるかといった動きを考える時間に乏しかった。動きについては、イメージすることと同様、学生にとっては時間の要することのようである。なぜ時間がかかるのかは、学生の感想からもわかる。「動きのパターン化」「実践力」「イメージと動きが繋がらない」などが挙げられた。「鳴き声を動きで表現する難しさ」「皆で同じイメージで同じ動きをすることの難しさ」なども挙げられ、興味深い点であった。

おわりに

調査の結果から、以下の事柄が明らかとなった。

- 学生が動きを考える際、題材となるものはストーリー性のあるものを重要視しやすい。
- 学生にとってストーリー性のあるものは動きのイメージがしやすく、イメージできると動き始めることができる。
- 学生はイメージのしやすいストーリー性のあるものでも「はしる」動きでのイメージがしにくい。
- 動きを考える上で、その物語のストーリー性をいかに言葉にできるかといった「キャッチする」学生の受け皿が必要である。
- 「動きのパターン化」「実践力」「イメージと動きが繋がらない」「鳴き声を動きで表現する難しさ」「皆で同じイメージで同じ動きをすることの難しさ」など多種多様な動きを体験する経験が乏しい。

「身体表現を引き出す」とは一体どういったことなのかを考えた時、学生自身の身体表現に関する特性をつかむ必要があると考え、今回の調査では学生が持つ身体表現の特性の傾向についてまずは検討した。

今回の調査から学生の身体表現が持つ特性の傾向が、学生の身体表現に対する経験値の乏しさや学生自身が求める表現に近づけられるだけの発想力・想像力の向上であることが明らかとなった。今後は、さらに多くの学生から身体表現における現状を調査・検討し、学生が思い思いに身体を動かして自分の思いを表現したりする体験を引き出すための刺激について考察していきたい。さらなる研究を重ね、保育現場に必要とされる身体表現力が、学生に身につくよう試行錯誤していきたい。

[注 記]

- 1) 擬音語・擬態語4500 日本語オノマトベ辞典、2016、p 115
- 2) 古市久子 こどもの動きを引き出すオノマトベ絵本、東邦学誌第43巻第2号、2014、p 87
- 3) 同上 p 103
- 4) 文部科学省 幼稚園教育要領 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/you/nerai.htm
- 5) 下釜綾子 身体表現活動におけるオノマトベを用いた動きとイメージ、長崎女子短期大学紀要第37号、2013、p 78
- 6) 古市久子 こどもの動きを引き出すオノマトベ絵本、東邦学誌第43巻第2号、2014、p 100-101
- 7) 高野牧子(編著) うきうきわくわく身体表現あそび-豊かに広げよう!子どもの表現世界-、同文書院、2015、p 36-37
- 8) 古市久子 保育者養成のためのテキスト身体表現、北大路書房、2012、p 3
- 9) 同 上 p 17
- 10) 同 上 p 35
- 11) 同 上 p 49
- 12) 同 上 p 79
- 13) 同 上 p 101
- 14) 同 上 p 119
- 15) 同 上 p 135
- 16) 同 上 p 161

[参考文献]

- 小笠原大輔 「保育内容(表現)」における複合的教材の試み-「造形表現」「音楽表現」「身体表現」を一度に楽しむ-、文学院院大学人間学部研究紀要 Vol. 13、2012、p 341-355
- 門脇早聡子 保育における身体表現活動の変遷に関する研究(1)-保育要領、幼稚園教育要領を踏まえて-、園田学園女子大学論文集第51号、2017、p 105-118
- 花原幹夫 保育内容表現、北大路書房、2005
- 厚生労働省 保育所保育指針 <http://www.mhlw.go.jp/file/06-Seisakujouhou.../0000160000.pdf>
- 桜田素子 ワクワク音あそび・リズムあそび、黎明書房、2003
- 内閣府 認定こども園教育・保育要領 <http://www.8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/law/.../pdf/s-youho-k.pdf>
- 名須川知子・池田裕恵 幼児の身体表現の「意味」についての研究 161-174
- 浜口順子編著代表 事例に学ぶ保育内容領域表現 無藤隆 監修、萌文書林、2008
- 松山由美子 若手保育者はどのように幼児の身体表現を引き出そうとしたのか-子どもの「表現する過程」を大切にしたい劇つくりの実践より-、四天王寺大学紀要第50号、2010、p 213-228
- 三井真紀 保育内容表現に関する考察-保育内容から小学校教育へつなげるために-、VISIO No.38、2008、p 135-143
- 三森桂子・小島エマ[編著] 実践保育内容シリーズ 谷田貝公昭[監修] 音楽表現、一藝社、2014
- 宮下恭子 学生のダンスや身体表現についての意識や自己評価に関する研究、東京成徳短期大学紀要44号、2011、p 1-16

保育者の役割の理解を促がす授業教材についての検討 —多文化保育・教育の授業における保育学生の感想に注目して—

A search for effective teaching materials that gain awareness
and understanding about the role of teacher.
—A focus on the impressions of students in multicultural nursery-related classes.—

中野 明子
Akiko Nakano

目 次

はじめに

1. 外国につながる子どもの国内の現状を知る
2. 小学校での生活科の授業の実際を知る
3. 上海の日系幼稚園の紹介
4. グループワークを通じた学生の意見および感想
5. 「多様性を認め合う」とは
6. 「多文化保育・教育への理解」の授業を通してみつけた課題
7. 「震災いじめ」との共通点
8. 学生との対話からの考察

おわりに

【要旨】

日本国内外を問わず、両親、もしくは父親か母親どちらかが外国籍といった「外国につながる子ども」は年々増加している。また海外へ赴任する家庭も増加の傾向にある。これらの現状をふまえ、平成30年度改定保育所保育指針、同年改定幼稚園教育要領、同年改訂幼保連携型認定こども園教育・保育要領の中でも、外国籍家庭など、特別な配慮を必要とする家庭に対して、状況等に応じて個別の支援を行うよう努めることと記されている。

保育教育の現場において「外国につながる子ども」およびその家族と出会った際に、相互理解や信頼関係を構築するための、子どもたちや保護者間の関係性を「つなぐ」役割を担う存在として保育・教育の多文化・国際化に対応できる保育者が求められている。

多文化保育・教育についての教育実践はまだ模索中という状況を踏まえ、多文化・国際化に対応できる保

育者の保育実践力の育成の意義について、養成校保育学科で学ぶ1年生を対象とした、多文化保育・教育についての筆者の授業の具体的な展開と内容を紹介し、授業を通して見いだした、多文化共生とその理解に向けての学生の感想に注目して、学びによって得られた気づきや、学生自身が授業を通して「保育者の支援のあり方や役割」について理解を深めることができたか考察し、どのような授業教材による学びが学生にとって有効であるか見いだしていく。

また、多文化を知る学びの根底には、無知や思い込みからくる差別や、偏見からの解放をめざす方向性があると考えられる。相手に同化を求めるのではなく、言語や食文化の違い等を認め合い、多様な価値観を尊重しあえる関係性、すなわち「敬意ある共生」に向かう心的態度について、子どもをめぐる「いじめ」の問題の視点と共に考察する。

【キーワード】 授業教材 保育者の役割
支援のあり方 多文化共生 自己肯定感

はじめに

外務省の統計によると、2013年10月1日現在、海外に滞在している日本人（在留期間が3ヵ月に満たない旅行者等短期滞在者は除く）の数は125万8263人で、統計をとり始めた1968年以来の最高を記録した。在留邦人の数はここ5年間で約11%、人数にして12万6456人も増加したことになる。これに伴い、海外の日本人学校（88校）、日系の学校（8校）、補習授業校（203校）で学ぶ小中学生の数も着実に増えている。その数は2013年5月1日現在、7万1628人。10年前の2003年の5万2462人に比べて2万人近く増加した。地域別では、アジアが大幅に増加傾向にある。

また、法務省入国管理局（2017年3月）によると、2016年末現在における中長期在留者数は約204万人、特別永住者数は34万人で、これらを合わせた在留外国人数は238万人となり、前年末に比べ、16万人（6.7%）増加し、過去最高となった。そのうち、未就学の乳幼児数（0～5歳）は、116万人（法務省在留外国人統計2016年）である。これは、日本の未就学の乳幼児数623万人（法務省2016年）の19%にあたる。

以上の現状をふまえ「外国につながる子ども」を筆者は3つの視点で捉え学生に提示した。

- ①日本国内で生活する親が外国人の子ども
- ②親の仕事の関係等で外国で生活する邦人家庭の子ども
- ③②の子どもが日本に帰国した際に環境の変化からストレスや困難を抱える子ども

それらのいずれもが「外国につながる子ども」ということを確認したうえで「諸外国の保育事情～外国につながる子どもへの理解～」について授業を実施した。

より豊かな「多文化保育・教育」を実践するために、保育者として配慮すべきことなど、具体的にどのような働きかけを子どもや保護者にしていく必要があるか学生に問い、考えを個別に引きだした。

これらの授業は、平成29年度1年次の前期・後期に、保育学科1年生を対象とした「保育原理」で実施したものである。

授業を実施する前に、外国籍の本学教員から、英語の授業のなかで、1年生のある女子学生から自分の名前を呼び捨てにされ、日本語の拙さを嘲笑されて非常に傷ついた。その学生に対して傷ついたことを率直に

伝え、母語ではない言葉で一生懸命話そうとする人に対して、傷つけるようなことはしてはいけないと論じたが、反抗的な態度で受け入れてもらえなかったと相談があった。その学生について、注意深くみるよう依頼され、臨んだ授業でもあった。授業を通して、保育者の支援のあり方や役割についての気づきや学びを、すべての学生が深めていくことを目的として、いくつかの授業教材を準備して授業を展開した。

以下、学生に提示した授業教材を、授業の流れと共に示していく。

1. 外国につながる子どもの国内の現状を知る

2016年1月に新聞（河北新報）で報道された『「親が外国人」29人に1人 保育・教育に課題』の記事をとりあげ、問題提起を行なった。

「2014年に国内で生まれた赤ちゃん約102万人の3.40%、29人に1人は、両親が外国人か、どちらかが外国人で、計約3万5千人に上ることがわかった。今後、保育や教育分野での対応が課題となりそうだ。（中略）外国人を親に持つ2014年の新生児の割合が高い都道府県は

- ①東京（5.92%）
- ②愛知（4.93%）
- ③群馬（4.81%）

親の国籍のうち、父、母とも最も多いのは中国で、2位は父が韓国・朝鮮、母がフィリピン、3位は父が米国、母が韓国・朝鮮だった」（河北新報2016年1月6日記事より抜粋）

【東北6県の国内で生まれた子どもの数（2014年）】

	新生児	両親が外国人、 どちらかが外国人の 新生児
青 森	8,872	99（1.12%）
岩 手	8,821	78（0.88%）
宮 城	18,158	256（1.41%）
秋 田	6,004	39（0.65%）
山 形	7,980	69（0.86%）
福 島	14,545	135（0.93%）

〔注〕 かつこ内は比率
河北新報作成図

これらの記事の内容に対して、何人かの学生が感想・意見を述べた。

「親が外国人の子どもは29人に1人で、福島は東北で2位だということが驚いた。確かにスーパーに買い

物に行ったときに、外国の方を昔よりも多くいると感じていて、国際化はすすんでいると思った」

「親が外国籍の子どもの数が、福島県内だけでもたくさん居ることを知って驚いた。多文化を理解した保育をしていくことや、親子へのサポート、支援をしていくことが大切になってくるのだと思った」といった感想が多く聞かれた。

また、「なぜ東北では、青森が第一位なのだろう」の問いかけに対して、青森県に実家のある学生が「三沢基地があるから」と即答したことが、印象に残った。

2. 小学校での生活科の授業の実際を知る

次に、2016年11月に福島市S小学校で開催された「教育研究公開」における生活科授業の実践を筆者が参観したことをもとに紹介した。

福島市内のS小学校1年生のクラスでは、「いっしょにあそぼうよ」の授業を、ALT（外国語指導主事）ロビン先生主導で、日本人のクラス担任も補助的な立場で参加し、25人の子どもたちと共に授業を実施した。単元の構想として「子ども達は、学校探検のなかでALTの存在に気づき『誰だろう』『もっと知りたい』『話をしてみたい』『自分のことを教えてあげたい』という思いを強く抱いている。また、中国人の親を持つ子どもやアフリカの楽器を通して現地の人と交流している子ども、英語を習っている子どももおり、外国の人や文化への関心が高い。

本単元は、外国の人とかかわりたいという子どもたちの思いをもとに、歌や遊び、絵本のみきかせを通してふれ合うことで、言葉の違いがあっても仲良くできる楽しさや嬉しさを実感し進んで交流していこうとする姿をめざしている。このように、外国の人を身近な人としてかかわり、交流することで、自分の良さや可能性に気づき、意欲と自信を持って生活することにつながると考える」¹⁾このようなねらいのもとに、英語での手遊び、歌遊び、英語でジャンケン遊び（ロック、ペーパー、シザー、1. 2. 3でジャンケン）「あらべこあおむし」の絵本のみきかせ、等をアメリカ人のロビン先生が、温かい笑顔とユーモアを交えた語りかけで展開していた様子を学生に伝えた。小学1年生の子ども達が、今まで慣れ親しんでいた、保育所や幼稚園等の乳幼児施設で行う遊びの要素がある活動を、安心した表情で、ロビン先生とハイタッチを何度も行い、喜びに輝く笑顔を全員がみせて楽しく授業を展開していた。

生活科の授業は、幼児期の学びから学校教育への円滑な接続を目的としたカリキュラム編成の工夫として現行学習指導要領において位置づけられた教科である。身近な外国につながる人と交流し、楽しくコミュニケーションをとる体験の機会として、また小学校へ入学したばかりの1年生の子どもたちにとって、遊びを通して学ぶことができる授業があることで、学校生活に円滑になじむことができるであろうことを実感できたことを学生に伝えた。すると、福島市内の小学校に通学していた学生が「私もロビン先生に習っていた」と嬉しそうに発言した。クラスの全員が小学校時代にALTの先生に生活科等の授業を受けており、楽しい授業であったと話していた。

これらのことから、小学校におけるALTの授業や生活科の授業の取り組みは、多文化への理解のきっかけとして大変有効なカリキュラムであると学生たちは確認できたようだ。

3. 上海の日系幼稚園の紹介

続いて、諸外国の保育事情を具体的に知る手立てとして「多文化保育・教育論」テキストより、筆者が執筆した「中国（上海）の保育事情」の内容をとりあげた。

上海における保育教育の実情、生活や文化の違い、外国資本をよびこむために、中国では外国人居住エリアが大変恵まれた環境にあること、上海市内に仕事の関係で家族で住む日本人の数が年々増加していることを確認し、本学卒業生が5年間勤務していた上海市内の日系幼稚園の事情を現地で勤務する保育者の映像とインタビューコラムも交えて紹介した。

（1）上海市内の日系幼稚園

緑の芝生が敷きつめられた、美しい環境の日本人居住地区に建つ、おとぎの城のような幼稚園が映し出されると、学生は歓声をあげて子ども達が遊ぶ様子と美しい景観に見入っていた。本学卒業生が上海の日系幼稚園でクラス担任として活躍している様子を映像で視聴し、海外での保育をより身近に感じたようだ。

「日本人が経営している日系の幼稚園は上海に9園ほどあるが、どの園も定員は常にいっぱいという状況である。保護者の仕事関係の異動も多いため、入退園する子どもの入れ替えが、一年を通して多いことも特徴のひとつである。また日本の幼稚園は3歳児から入園できるが、上海の日系の幼稚園では、就園年齢を2歳児もしくは3歳児からとしているところが多い。（中略）

上海在住の日本人家庭において、日系の幼稚園への入園希望者が多いのは、日本の文部科学省より告示された『幼稚園教育要領』に基づいた保育・教育を実践していることと、担任とのコミュニケーションを母国語である日本語で図れることが大きな要因と考えられる。海外での狭い日本人社会において人間関係に悩む母親も増えていて、幼稚園の担任等に相談するケースも多く、言語の壁がない日本人担任を希望する保護者は多い。日本ではみられない日系の幼稚園の特色としては、日本人担任の他に、現地で採用した中国人スタッフを副担任として配置し、カードや絵文字を使って遊ぶなかで中国語を教える活動を行い、子どもたちが上海での生活に早くなじむことを目的とした語学教育を行っている園が多いことである。

上海在住の子どもをもつ日本人家庭では、“阿姨（アイ）”²¹⁾を「アイさん」と呼んで、家事手伝いやベビーシッターとして雇い、幼稚園の送り迎えもアイさんに任せている家庭も少なくない。日本の幼稚園と同じ午後2時位に降園した子どもをアイさんが迎えに行き、3時のおやつを食べさせた後、近くの公園で子どもが遊ぶのをアイさんが見守る姿は、上海では日常良くみられる光景である。

海外では仕事関係の催しや行事に夫婦単位で出席することが多く、上海も例外ではない。急に子どもを預ける必要が生じた場合、信頼関係を構築することができたアイさんに子どもを任せたいという考えから、普段から何人かのアイさんに交代で来てもらい、そのなかから常勤のアイさんを選んでいくというケースが多いようである。他にも、母親自身の趣味の充実や、父親だけでなく母親自身も上海で働くために、アイさんを雇うケースが増えてきている。上海で子育てをする日本人家庭において、アイさんは子育てを支えてくれる頼もしい存在なのである」²⁾筆者が上海の保育事情を視察した際の経験を交えて学生にテキストの内容をもとに紹介した。一見華やかに見える夫の仕事上の社交の場で、夫の仕事での立場が、そのまま母親同士のかかわりにも影響し、そのストレスを幼稚園の担任に打ち明ける母親が多く、落ち着いて話すことができる談話室なども幼稚園では設けている。子育てや自分自身の悩みを相談できる相手として、言語の壁がない日本人担任を希望する保護者は多く、日本人が運営する日系の幼稚園に入園希望が集中するのは、実はこれらの理由が一番影響しているとの日系の幼稚園園長からの話を伝えた。

日本でも増え続ける虐待ケース等の保護案件の背景には「孤立」と「余裕のなさ」は必ずあるといわれる。海外生活の中で、急激に変化した環境になじむことができず、友人や実家の家族からも遠く離れた夫の赴任先で、自分の悩みや不安を誰にも相談することができず「孤立」と「余裕のなさ」に陥りやすい状況が生まれている。

(2) 上海の日系幼稚園で勤務した保育者へのインタビュー

冒頭で述べた通り、アジアにおいてはここ10年日本人学校²²⁾の児童・生徒の数が急伸している。上海日本人学校は虹橋校、東浦校、高等部から成り立ち、日本人学校としては世界最大規模である。就学前の子どもも多く、日系幼稚園の多くは広大な日本人学校の校庭を借りて運動会を開催している。運動会には、両親は勿論、日本から祖父母も飛行機でかけつけて、子どもや孫への応援で、熱気と歓声に包まれる。

最後に上海市内の日系幼稚園に5年間勤務した経験のある保育者の協力を得て「多文化保育・教育論」のテキストに載せたインタビューを紹介した。

「若いうちに海外で働いた経験をもてたことは、本当に良かったと思います。

上海に限らず、海外で生活していくには自分のなかで何に対しても好奇心をもつことが大切です。カルチャーショックは必ず受けるので、好奇心がないと負けてしまいます。

保育と同じで柔軟さも大切です。子どもは一人一人違うため、柔軟に対応することが求められるように、上海でさまざまな国の人とかかわるにも柔軟さが必要です。上海の同じ幼稚園で働いていた保育者のなかには、途中で辞めたり、挫折して苦しんだり、いつもイライラしている人もいました。自分が幸いそうならなかったのは、うまくいかないことを怖がらなかったからです。そういうものかと納得したり、うまくいかないことをおもしろがる気持ちがあったからだと思います。人生のなかで海外での生活経験を一度はしてもよいと思います。海外で生活すると世界のなかの日本がよく見えて、それは日本に帰ってきてからもとても役に立っています。私の場合、日本で社会人としての勤務経験がなく海外に行ったことはよかったです。大学を卒業してすぐに海外で勤務することに対しては賛否両論あると思いますが、まっさらな気持ちで行けたから受け入れられたと思います」³⁾

上海から帰国後、現在は郡山市の小学校で特別支援学級の支援員として勤務する、この保育者が語った海外勤務経験に思いをさせ、学生たちは聞き入っていた。

4. グループワークを通じた学生の意見および感想

以上の講義を実施した後、保育の現場において、外国につながる子どもや保護者とのかかわりや支援に求められるもの、相互理解をどのように深めていくことができるのか、その手立てについてグループ討議等を通して、より良い支援のあり方についての検討を試みた。

授業を実施したクラスは延べ4クラス、履修学生数は130名である。1クラスの学生の中に中国国籍の学生が1名在籍している。

グループ討議は3つの設問を投げかけて、その問いにそって自分はどのように考えるかを3枚の付箋（ポストイット）に記述したあと5～6人のグループでディスカッションを行い、保育者の役割や専門性について話し合った。

- A. この授業で感じたこと
- B. 多文化（異文化）への相互理解をどのようにしたら深めていけるか、その手立てを具体的に考えて書きましよう
- C. 外国につながる子どもや保護者との支援やかかわりに求められる保育者の役割、専門性はどのようなことか。

以下、学生が記述した主な意見、感想を設問順に紹介する。

A. この授業で感じたこと

- ①「国内で生まれた外国につながる子どもの数が29人に1人で、福島県が東北で2番目に多いということに驚いた」（22名）
- ②「国際化が進み、外国につながる子どもたちも増えているのだと知ることができた。小学校の時、クラスにモンゴルの男の子が居て、その子はいつも明るく、クラスの中心的存在だった」
- ③「高校の時の友達がフィリピン人とのハーフだった。家庭環境は日本に住んでいながら全く違っていた。3歳の妹がいて幼稚園に通っていたが、お母さんが日本の先生とうまくコミュニケーションがとれなかったようだ。これからは、外国人の保護者への支援も大切になってくると思った」
- ④「小学校の時、クラスに中国から転校してきた子が

居た。やはり最初は片言の日本語で、なかなか会話がすすまなかったことを思い出した」

- ⑤「交換留学でブラジルから来た生徒と友達になった」
 - ⑥「小学生の時に生活科の授業でALTの先生と楽しく英語を学んでいたことを今日の授業で思い出して、なつかしく思った」
- 等、子どもの頃から身近な外国につながる人たちと出会ったことを思い出したという感想がほとんどのグループで話し合われていた。②～⑥のように、その思い出を具体的に記述したのは28名であった。
- ⑦「本学の先輩が、外国（上海）で働いている方が居たということに驚いた。外国で保育者として働くという考えもあると知り、視野が広がった」
 - ⑧「外国に元々興味があったので、外国の保育事情について話を聞いて良かった。海外青年協力隊など行ってみたいと思っていたが、まさか新卒で保育の仕事に就職するような道もあるとは思わなかった」
 - ⑨「一度でいいから、海外で働くことを経験したいと思った」
 - ⑩「自分の興味のある授業で、とても楽しかった。海外に行ってみてみたい気持ちが強くなった」
 - ⑪「日本を知るためにも外国に行きたいと強く思えた」など、将来の仕事の勤務地として、海外での保育に興味関心を強く抱いた感想を書いた学生は13名であった。こうした感想の他に
 - ⑫「やはり文化や歴史が異なる国だとカルチャーショックもあり、そのような面でもカバーしていくことが保育者の役割だということを再認識できた」
 - ⑬「上海に、日本人のための幼稚園があることを知らなかったし、そこに居る保育者は、さまざまな国の人が居ることに驚いた」
 - ⑭「これから、国内でも外国につながる子ども、保護者と出会うと思うので、今日の授業で学んだこと、知ったことを生かしたい」
 - ⑮「外国の人や文化に興味を持つことは大切だと思った。外国の人を身近な人として関わることで、自分の良さや可能性に気づき、意欲と自信を持って生活につながるという言葉が印象的だった」
 - ⑯「私は英語が苦手日本で日本から出たくないと思っていた。授業を受けて多文化にふれるのも楽しそうだった。母が母子支援員として働いていて、小さい頃母の都合で施設に伺った時に入居者のフィリピン人の女の子と仲良くなったのを思い出した」
 - ⑰「自分でも、もっと他の国の保育事情を調べてみよ

うと思った」

- ⑱「今まで高校の授業では、日本と外国との違いについてだったので、日本人が外国でどのような苦勞をしているのか、外国とのつながりを保育の視点でみることができた」

等の外国及び外国につながる子どもに興味関心を示した感想が89名と、約7割にのぼった。

前述の興味関心を強く抱いている学生と合わせると102名、約8割の学生が外国につながる子どもや保育者、異文化・多文化の保育について関心を寄せたことがわかった。これは、筆者の予想以上に多い数値であった。

- B. 多文化（異文化）への相互理解をどのようにしたら深めていけるか、その手立てを具体的に考えて書きましよう。

- ⑲「遊びのなかで、異文化の遊びを取り入れたり、外国の服を着てみたり、外国の伝統料理を親子でつくる場と機会を設ける」

- ⑳「他国の伝統料理を給食でだし、その国の言葉で食事の挨拶をする」

- ㉑「保育園の頃、お母さんが中国人の友達がいた。そのお母さんは餃子を作るのがとても早く、園で餃子を作った時には、ヒーローようになっていた。国籍が違うことに負い目や引け目を感じる人も多いと思うので、このような機会を取り入れていくと良いと思った」

- ㉒「私には、中国人の友達がいる。確かに文化は違うけど、すごく仲がいい。文化が違ってても、お互いが違いも含めて理解しあえば、いい関係ができるのではないかと思った」

- ㉓「外国人の子どもがいたらみんなに知ってもらうことが大切だと思う。私が幼稚園の時、アメリカ人の子どもがいて、先生はその子にみんなに英語を教えるようお願いしていた。その子にみんなが興味を持ちはじめ、国の文化の違いにみんな驚き、楽しく話したことが印象に残っている」

㉑㉒㉓のように、自身の幼少期の外国につながる人とのかかわりを思い出したり、現在身近にいる親しい関係性の、外国につながる人との交流から、多文化について思いをさせた学生もみられた。生活や遊びを通して、お互いの国の文化や遊びの違いを体験し、体験を通して理解していくことが大切であることを、多くの学生が感じ取り、具体的なコミュニケーション手段

としてあげていることから、子どもが成長するうえで、大切なことを保育の視点から捉えられていることがわかった。

- C. 外国につながる子どもや保護者との支援やかかわりに求められる、保育者の役割や専門性はどのようなことか。

- ㉔「外国では、日本で働く以上に保護者の方や子ども達への内面的な支援が求められてくると思う。もしかすると、子どもへのサポート以上に、保護者の方へのサポートが必要になってくるのではと思った。保育者という職業ではあるが、相談役という面でのサポートも多くなると思う」

- ㉕「その国の習慣や、子育てのやり方について、理解することが必要だと思う。また親は、自分の住んでいた国と違っていたり、子育てについては共有できなかったりすると、不安がさらに大きくなると思うので、気持ちに寄り添い、多くの視点から支えてあげなければいけないと感じた」

- ㉖「子どもを保育・教育するだけでなく、先生の話でもあったように、相談できる相手だと思った。子ども、保護者にとって、心を開ける存在であることが大切だと思った」

- ㉗「私の母も、下の妹と弟の幼稚園の先生との関わりに苦しんでいた。日本語の理解があまりできず、文化の違いで受け入れられないこともあった。大切なことは、お互いを理解し、尊重しあうことだと思う。違いをおもしろがることに、とても共感する」(中国国籍の学生)

㉔㉕㉖のように「心を支える、相談できる相手のひとりとなる存在」といった相談援助の資質が必要と記述した学生が60名、約半数であった。

- ㉘「言葉が通じにくい外国人の保護者にも伝わるようなコミュニケーションをする努力が必要」

- ㉙「保育者も英語力を身につけ、保護者間にとって説明できるような理解力、知識が必要」

- ㉚「日本の保育所、幼稚園に通わせる外国籍の親は、周りの日本人の親とうまく関われないこともあると思う。そのような時のサポートが、保育者として大切な役割だと思う」

- ㉛「温かさで観察力は必要」

⑳～㉑のように、「自身の語学力、人を結びつけるコミュニケーション力、多文化理解を高める努力」など、保育者として自分自身を高める努力を記述した学生は100名、約8割であった。

また、上記の記述のなかには

㉒「言葉が通じ合うことは大事なので、もっと語学のスキルが必要。しかしその人の国のきまりや文化を知ることも大切だと思う。言葉を覚えたからといってその国のことを何もわからなければ、保護者の気持ちや考えもわからない。理解することで、支えることができると思う」

㉓「コミュニケーション能力を高めながら、悩みを共有し、子どもと親の気持ちに寄りそうことが求められる」

㉔㉕のように、保育者として自分自身を高める努力と、相談援助の資質の重要性と、いずれの内容も合わせて記述した学生も多く、どちらも保育者としての大切な役割と専門性であることを認識していることが伺えた。

㉖「日本でも外国でも、保育は楽しいが、大変だということは同じだということがわかった」

との記述にあるように、学生達が、国を問わず、保育者・教師の役割や専門性に、共通する要素を見いだしたことは、「支援」や「援助」の根底にある本質は、普遍的な要素があることの気付きにつながる。これらは「保育者に求められる役割、使命を理解する」保育者論の授業の到達目標とも合致する。豊かな多文化保育・教育のあり方について理解を深めることは、より深い保育者論の真髄を捉える機会ともなるであろう。

5. 「多様性を認め合う」とは

グループワークで学生同士が様々な意見、感想を述べ合った後、グループごとに最も活発に意見交換されたことを発表した。発表内容は、上記の学生からの主な意見と同様の内容が多かった。

学生から出た意見、感想について、共感しながらクラス全体で共有した後、多様性を認め合うことについて、ひとつの問題提起を投げかけた。

2017年11月27日毎日新聞に掲載された「教育の窓『誰のための学校なのか』」から、頭髪黒染強要について取り上げた記事の内容を紹介した。記事の冒頭に「頭髪が生まれつき茶色なのに学校から黒く染めるよう強要されたとして、大阪府立高3女子生徒（18）が府に損

害賠償を求めた訴訟を巡る報道に関連し、学校での頭髪指導について読者から感想や意見が多く寄せられた。現役の高校生や、かつて子どもが指導を受けた保護者らからの声もあった。一部を紹介し、頭髪指導のあり方を考えたい」とあり、その中から、ある男子大学生は「中略『理不尽な頭髪指導はこれまでほとんど認識されず、気になっていた。今回の訴訟で明らかになったがようやくか、とも思う』と語る。来春から教師として教壇に立つ予定だが、教育の現場が実際にどうなっているか分からない。それでも、理不尽な頭髪指導はしたくない。『学校教育は誰のためにあるのか。それをもう一度考えていきたい』」との意見を紹介した。

受講した学生たちも関心を持っていた記事のように集中して聞いていた。

その後、筆者が2017年5月21日に参加した日本保育学会における、品川⁴⁾の口頭発表「スウェーデンにおける多文化保育の現状」の中で、品川がスウェーデンにおける保育スタッフの採用について説明を行った際に、「子どもの母語につながるスタッフを積極的に採用している。園の人的環境に多様性を取り組む工夫については、国籍は様々で髪や肌の色も様々なスタッフ、性別、セクシャリティも様々である。ファッション等も個性を尊重する。ゲイの保育者も採用し、タトゥーをしていたり、髪をあえて緑色に染める保育者もいる。子どもたちに、世の中には多様な人間が居ることを伝え、多様な民族、多様な価値観、多様な個性が楽しく共生できることを、保育を通して子どもに伝えることを意図している」発表内容を学生に伝えると、驚きの声が上がった。

多様性を考察する際に求められるのは、目の前にある自国やローカルな地域の視点のみではなく、世界に目を向けた視点からも、俯瞰して考察していく必要性を示唆した。多民族多国籍国家において、黒髪を強要することは差別となるであろうことを伝えた。同化を強要することは、多様性を否定することになりかねないことが、伝わることをめざした。

さらに学生たちへ「これから実習を行う保育教育施設に、緑色の髪やタトゥーをした姿で行って良いか」と問うと、笑いと共に学生は否定した。日本の東北地方における地域性と文化、保育において子どもや保護者に安心感を与える服装髪型に配慮できることも、多様性を理解することにつながることを示唆し、授業は終盤を迎えた。

6. 「多文化保育・教育への理解」の授業を通してみつけた課題

本学の場合、福島県内からの進学者が約80%を占めている。年齢も殆ど同じであり、幼少期に経験した保育・教育の内容は共通するものが多く、諸外国と日本の保育制度の違いを理解することは、比較的容易にできていた。

保育原理の授業では他にも、西洋と東洋の「子ども」の捉え方の歴史の変遷や、一神教と東洋思想の精神性、考え方の違い等についても解説している。他国を理解するには、自国の歴史や文化を知る必要があり、国によって文化や宗教観の違いがあることを認識することが重要であることを教授する必要性が益々求められると考える。

筆者が横浜市の認可保育園に勤務していた際に系列の上海の日系幼稚園に出張で赴き、現地の中国の方と交流し心がふれ合う瞬間を実感する経験をするなかで、以前は中国に対して抱いていたイメージが変わったことを授業の最後に学生に伝えた。その国の印象は出会った人で変わることもある。国際人として、個人の印象は自国の印象にもなりうることを伝える意図があった。学生の中で海外滞在経験と渡航経験が豊かなAさんに、海外で生活するなかで豊かな時間を過ごせたといった話を期待して授業の感想を尋ねたところ「私は先生の気持ちがわかる。私も中国人が嫌いです」と強い口調で発言した。出会ったなかで、仲良くなれた中国の方はいなかったか尋ねると「いません。今も嫌いです」と言い切った。それ以上尋ねることはせず、保育教育の現場にも子どもたちや保護者に中国の方もたくさんいること、これからの出会いのなかで、心が通いあう人があるかもしれないことを伝えて授業を終えた。そのような発言が学生から出るとは想定していなかったため、少なからずショックであった。

後日、Aさんと研究室で二人で話をする機会を持ち、授業のなかでの発言について、理由を尋ねた。「中国の人を嫌いですとみんなの前で言ったのは、確かにまずかったですね。今休学している学生の母親も中国の方だと聞いていたし、そういうことをよく考えて発言しないとだめだなと思いました。すみません」と謝ってきた。授業での発言に対して謝罪を求めているのではなく、なぜそのような気持ちや考えになったのか聞かせてほしい、と請うと「親が旅行が好きで、小学生の時からよく海外旅行へ一緒に行って、東南アジア、中

国、韓国、タイ、カナダによく行っていた。どこの国に行ってもチャイナタウンはあって、華僑の方と出会うことが多かった。中国の人たちが身近で、チャイナタウンで食事をすると、中国の方の声の大きさや食事のマナーの悪さに戸惑った。電車も我先に乗って座席に座ろうとしたり、ホテルに泊まった時も部屋の使い方がとても乱雑だったり、子どもの頃にびっくりすることばかりで、カルチャーショックを受けた。タイや台湾の人達はまた違っていて親日家が多く穏やかで、そうした経験を通して、なんでこんなに違うんだろうと思った。中国の人に対する苦手意識が強いのは、幼い頃の体験から来ているのだと思う」と述べた。子どもの頃の出会いと体験が、その後の「外国につながる人」への印象にプラスにもマイナスにも影響することが、海外での生活経験が豊かなAさんにもあてはまることを感じた。

「外国人の子ども白書」の中の、教育の現場のエピソード「中国は悪い国だ!」を紹介する。「中学1年の英語の教科書で、登場人物の1人が中国出身という設定であった。『China』という単語を入力すると、突然1人の男子が『俺、チャイナ大っ嫌い!中国は悪い国だ』と叫んだ。彼の所へ行き一言『あのね、お父さんやお母さんが中国人という人がいるよ。その人が今の言葉を聞いたら悲しいでしょ。やめなさい』『そうなの。知らなかった』放課後、彼を呼んで『なぜ、あんなことを言ったの』と聞くと『なんとなく』『じゃあ無意識なんだね』『うん』『意識しなくちゃいけない。例えば、あなたの家族に障害がある人がいるとする。先生があなたの前で、障害のある人の悪口言ったらどんな気持ちがする?』『嫌な気持ち』『そうだね。だから、これからは気をつけてね』事実、そのクラスには祖母が中国残留孤児で母親が中国つながりという生徒がいた。彼の差別発言をその場での確に指導できるかが、周囲の友人や当事者の中国つながりの生徒への支援につながっていく。子どもたちが幼ければ幼いほど、自分の思ったことをすぐに口にする。それが良いか悪いかを周りの大人から注意されていなければ、無意識になる」⁵⁾と大谷は述べている。

子どもの発言に対して敏感に捉え、教室のなかには、様々な外国につながる子どもがいる可能性を常に想定したうえで、保育・教育を行う必要性と重要性を確認することができた。

同白書では、外国につながる子どものいじめの問題にもふれている。「日本にいる外国につながる子どもた

ちのほとんどは、いじめられた体験をもっている。言葉、見た目、名前が日本風でないこと、それは『いじめてよい存在』として疑われない多くの日本人にとって、罪の意識を持たずに加害してよい存在ととらえる。いじめの克服には、いじめる側の意識改革が必要である⁶⁾と記されている。

筆者が保育原理のテキストを執筆した「保育者の専門性」のなかで、いじめの問題にふれた内容を紹介する。「現在も増え続けている学校での『いじめ』の根っこには、『できない自分は（親や先生から）認めてもらえないのではないか』という恐れや不安があるのではないのでしょうか。自分より立場の弱い者を攻撃することで無意識に自己の優位性を示すための行為として、もしくは愛情が満たされないことに対する悲しみや苛立ちのはげ口として、『いじめ』に走る子どもがいます。また、失敗を恐れて挑戦しようとしないうちも増えています。『安心して失敗できる』関わりが、『安心して何度も挑戦できる』子どもを育てます。学校生活のなかで深刻な『いじめ』にあっても、『親に心配をかけるから』と誰にも相談できず自らを追い詰めて命を絶つ子どもの背景には、このような心理が働いているのではないのでしょうか。『助けて！』『困った！』が言える関係性、安心して弱音を吐ける信頼関係、アタッチメントを築いていくことが『存在レベルでの自己肯定感』¹³⁾を育くむうえでとても大切になってきます。『存在レベルでの自己肯定感』が確かな土台となっはじめて、『達成感を伴う自己肯定感』へと向かうことができるといえるでしょう⁷⁾と解説した。

子どもたちが、ありのままの自分を認めてもらえるという安心感、すなわち、存在レベルでの自己肯定感を一人一人が持てることで、他者の多様な存在を認めることにつながる。同化を求めるのではなく、敬意ある共生へと向かう原点であり土台となると筆者は考える。

7. 「震災避難いじめ」との共通点

「ぼくはいきるときめた」2016年11月16日の朝刊に、新聞各社が一面に報じた記事から、福島民友新聞に掲載された「横浜避難の生徒いじめ」記事の内容を紹介する。

「男子生徒は15日、代理人の弁護士を通じて手記の一部を公開。代理人によると『いじめの被害がなくなってほしい』との思いから公表を決めたとしている。手記は不登校になっていた昨年7月、小2で自主避難し

た直後から名前に菌をつけて呼ばれるなどのいじめを受けており『ばいきんあつかいされて、ほうしゃのうだとおもっていつもつらかった。福島の人はいじめられるとおもった』とつぶった。小5の時に『(原発事故の)賠償金をもらっているだろう』と言われ、同級生らの遊興費などを負担したことについては『ていこうするとまたいじめがはじまるとおもってなにもできずにただこわくてしょうがなかった』としている。学校側に何度訴えても対応してもらえなかったことにも触れ『いままでいんなはなしをしてきたけどようしてくれなかった』『(先生に)むしされてた』と悔しさをにじませた。手記の後半では『いままでなんかも死のうとおもった』と振り返った上で『でも、しんさいでいっぱい死んだからつらいけどぼくはいきるときめた』と結んでいる。手記を読んだ母親は真相解明に向けた決意を固め、昨年12月、調査を求める申し入れを横浜市に提出した。母親は共同通信の取材に『学校も教育委員会も対応してくれず、親子で自分たちを責め続けた。これを機に学校の体質が変わってほしい』と話している」とある。さらに2016年11月24日の福島民友新聞朝刊に「全国で苦しむ子助けて」の大見出しで「原発避難いじめ 両親会見で代弁」が掲載された。

「原発事故で本県から横浜市に自主避難した中学1年の男子生徒（13）がいじめを受けていた問題で、両親が23日、横浜市内で会見し、生徒が『全国で苦しんでいる子どもをとにかく助けてほしい』と話したことを明らかにした。両親が会見するのは初めてで、会見に向かう両親に、生徒が告げたという。(中略)生徒は2011年8月に、避難に伴い横浜市立小に転校した。転校当初からいじめはあったが、校長が毎朝、校門で生徒を待って教室へと送り届けたり、担任からこまめに連絡があるなど、学校全体が親身になって受け入れていたという。母親は『仲の良い友達もいて、何とかやっていた』とした。4年になって学校の教員が変わると状況が一変。5年の時、担任に家庭調査票で被災して避難していることを報告しても『関心を持ってもらえなかった』ほか、『プロレスごっこ』と称した暴行や金品のやりとりがあった。生徒は母親の財布から金を抜き取り、『お金を渡せば仲良くしてもらえ、暴行がなくなった』と答えたという。いじめについて母親は『自殺してもしょうがない内容だった』と表現。生きる選択をしたことに『生きててくれてありがたいしかない』と振り返った。これまでに市教委や学校から直接の謝罪はないとしており、両親は不信任をにじませた」とあ

る。また、同紙の両親記者会見要旨の会見での最後の言葉は「人に対しての優しさ、人を思う気持ちを持ってほしい。道徳として学校、保護者が教えてほしい。このことがきっかけとなり、今の制度が変わってくれることを願う」と結ばれている。

この勇気ある行動をとった「福島から自主避難した生徒」は「外国につながる子ども」に名称をおきかえても、文脈は変わらず、つながるのではないか。

首都圏の子どもにとっては、行ったこともない「福島」という放射能に汚染されてしまった地域から来た子ども、というイメージがあり、自分たちの生活圏からすると「異文化」から来た生徒に対して、例えば貧困に苦しみ、それを誰にも言えず相談できず、苦しむ子どもにとって、それは自分の抱えている大きなストレスをぶつける対象として、選ばれてしまったのではないかと筆者は考える。

また、この両親の会見の記事から読み取れることは、担任が変わったことによって、「いじめ」は悲惨さを増していったという事実である。子どもの年齢と成長に伴う、心理的な葛藤の時期と重なることを考慮しても、「いじめ」が頻繁に起こり絶えない常態化しているクラスと、「いじめ」がほとんどないクラスに分かれるのは、クラス担任の人間性と子どもたちひとり一人の状況を把握し寄り添っていける指導力が影響することは非常に大きいと考える。

保育においては、生活や遊びを通して子どもの発達を支えていくために、保育者に「総合的な指導力」が求められるが、「総合的な指導力」の根底には「豊かな温かい人間性」がなくてはならない。それは、学校教育の現場の教師にも同様のことが求められるであろう。

すべての子どもたちに、「存在レベルでの自己肯定感」があるならば、このような立場の弱い他者へ攻撃を向ける子どもは少なくなると考える。それは、大人の社会にもいえることである。「外国人の子ども白書」⁸⁾では日本のいじめの構造について「日々さまざまな人が発言権をもった有名人とマスメディアに一体となってバッシングされている。ある有名人の不倫騒ぎの時に、『まるでいじめていい人を探してるみたいだね』と生徒が言った。即座に『いじめていい人なんて、いないんだよ』と返した。しかし、制度や政策や法律によって、アイヌ・同和地区・ハンセン病患者・障害者・外国人等にされてきた差別の歴史をみれば、『いじめていい人』を意識的につくり出し、それを意識させないことを教育してきたことは明白である。教室で起こるい

じめは、自分に対する自信のなさから、他人を攻撃し低めることによって自分を保とうとする心理によるものが多い。容姿、成績、運動能力、家の貧富、センスなどの『違い』をうらやみ、ねたむ、リーダー格になった者の少しの過ちを許さずに叩く。強者が弱者になり、弱者が強者になる瞬間である。根底にあるのは自尊感情の低さとジェラシー。子どもたちは『あなたは、あなたのままでいい』と受け入れられてきた体験がなんと少ないことか』と述べられている。

子どもをめぐる「いじめ」の問題は、すべての子どもの根底に潜む「できない自分は、親や先生から、見捨てられるのではないかと」といった怖れや怯えに支配され、家庭が貧困にあることを誰にも悟られまいと苦しむ「見えない貧困」⁹⁾層の家庭の子どもが増えていることも背景にあると筆者は考える。

「いじめ」をめぐる問題について、多文化共生、敬意ある共生の視点を重ねることで、今の子どもたちに必要とされる保育・教育と、求められる保育者、教師像についてイメージすることができた。それらを実践していくために必要な保育者養成の具体的な手立てについて、また子どもをめぐる家庭も含めた保育・教育の環境のより良い改善の必要性に対して、今後も検証を重ねていきたい。

今回の「多文化保育・教育」の授業では、このような「いじめ」の問題にまでは掘り下げなかったが、「保育者の役割や専門性」や「子どもの心の発達、アタッチメントの重要性」の授業内容で、これらの子どものいじめをめぐる問題にふれ、考察した。学生が、いじめをめぐる子どもの心理や心情について理解するうえで、「多文化保育・教育」の授業で行った、多文化共生の意義についての内容が、理解を深める一助となったと考える。

8. 学生との対話からの考察

「多文化保育・教育」の授業終了後に、外国につながる子どもや、多文化保育・教育について、強い好奇心と関心を示し、研究室を訪れた二人の学生の言葉を紹介する。

将来フィリピンで保育者として勤務したいと強く希望する学生Bさんは「海外で働きたいと思ったのは、憧れからはじまった。正直、英語も苦手だし、海外で働くのは難しいと思っていたが、先生の授業を受けて、より身近に感じる事ができた。悩んでいる母親の支援がしたい。母親同士の交流会を企画する時に、日本

の文化をテーマにして海外で日本の文化を知ってもらい、伝えることもしてみたい。日本は、保育の問題が多すぎる。海外を知って学んで、日本との違いを実感して、外国の保育で優れたところを日本に還元したい。諸外国の保育事情を、もっと知りたい。今おつきあいしている彼の母親がフィリピンの方で、とても素敵な人。『好きな言葉は大丈夫』『めいわくかけなさい』『やってみなさい』といつも温かい前向きな言葉をいただけて、自分の財産になっている。そういう方が育ったフィリピンに行ってみたい、ということも大きい」

少し上気しながら、将来の夢を語るBさんを通して、良き人との出会いがその国との出会いと重なるのだということを確認できた思いがした。その良き出会いをつなぐことが、保育者の役割としてあることを、学生との対話と共に見いだすことができたように思う。

授業の後「多文化保育・教育論」のテキストを借りたいと申し出た学生Cさんは「授業を受けて、映像を見たり実際に上海で経験した話を聞いて、そういう道もあったかと思った。やってみたいとピンときて母に気持ちを話したらとても賛成してくれた。日本だけではなく、違う国の保育の仕方を体験したい。生まれ育った会津は、外国からの観光客がとても多い。会津の人は丁寧ですねと言われて、本当にそうなのかといつも思っていた。外から日本を見てみたい」Cさんは自分でも調べ、友人が長期滞在したことのあるタイへの関心を寄せていた。保育・教育は専門職であり、就労ビザもとりにやすく、海外でも専門職で働けることを伝えると驚いていた。そうした事実を知らない、発想そのものがない学生が多いことを実感した。「世界中どの国にも日本人は勤務しており、その家族の多くは母語で話せる日本人の保育士、幼稚園教諭を求めている。資格免許を取得することは、保育者としてあらゆる地域で働ける自由へのパスポートを手に入れることだと思っ

ていい」と授業時に伝えた時の学生の反応に手ごたえを感じた理由がわかったように思う。前述した中国に苦手意識を持つAさん、親しい友人の母親を通してフィリピンに親近感を抱くBさんのように、その国のイメージは出会う人によって左右されることもある。そして、どのような人と出会うかによって、人生は変わっていくことを、これから体験を通して学生たちは体感していくであろう。この授業をきっかけに学生一人ひとりが多文化保育・教育に今後も関心を持ち、将来出会うであろう「外国につながる子どもたちと保護者」とのより豊かなかかわりと敬意ある共生に向けて、学

び続けていくことを願う。

おわりに

より豊かな「多文化保育・教育」を実践するために、保育者として配慮すべきこと、具体的にどのような関わりや働きかけを子どもや保護者にしていく必要があるか、保育者の役割で大切なこととは何か、学生に問い、考えを個別に引きだしながら、多文化を知る学びの根底には、無知や思い込みからくる差別や偏見からの解放をめざす方向性があることをさまざまな授業教材を通して学んできた。

冒頭の「はじめに」で述べた、外国籍の本学教員から、英語の授業のなかで、1年生のある女子学生から、自分の日本語の拙さを嘲笑されて非常に傷ついたと相談された、その女子学生の授業での感想、コメントを紹介する。

A. この授業で感じたこと

外国人に対する保育の内容が聞けて楽しかった。言葉が違う子への接し方など、将来に役立つ話だったので、もっと聞きたいと思った。

B. 多文化（異文化）への相互理解をどのようにしたら深めていけるか、その手立てを具体的に考えて書きましよう。

日本の文化が全く理解できていない人に文化を教えるのではなく、その人の育ったふるさととの文化を保育者が学んでいくことが大切なのかなと感じた。相手に寄りそうこと。

C. 外国につながる子どもや保護者との支援やかかわりに求められる保育者の役割、専門性はどのようなことか。

その国独自の遊びを、子ども同士で教え合う場面をつくってあげる。困っていたら、保育者が手助けして、みんなで楽しかったら最高。

さらに、この女子学生は授業のなかで「将来は、アフリカなど発展途上国の子どもたちのために、支えになれる保育者をめざしたい」と発言した。

これらのことを、相談してきた外国籍の教員に報告すると、大変驚いていた。

学ぶことで変化し成長していくことができることを確認すると共に、外国に対して強い興味関心を抱いているからこそ、マイナスの関わりをしてしまった可能

性についても思いをはせていた。しかし「この学生の態度は、もっとチェンジしないと難しいと思う」とも述べていた。「授業で書く内容、発言すること、本当の思いは違うこともある。この学生の、育った家庭環境や、コンプレックスからくると思われる、態度の攻撃性についての印象は、まだ変わってない。しかし、こうして自分の未来のビジョンや思いを書いていることは、驚きだった」とこの学生の感想、コメントについての印象を話していた。

これらの授業を通した学生の感想や反応と、授業後に筆者へ相談や感想を述べに訪れた学生の言葉等から、学生自身が授業を通して「保育者の支援のあり方や役割」への理解を深めることができたか考察し、「多文化保育・教育」についてのどのような授業教材による学びが学生にとって有効であるか、見いだした結論を3点提言する。

- 1) 「外国につながる子どもや親」の状況を、統計による具体的な地域と人数の提示、特に東北6県の人口の割合に学生が注目し、意見や感想が多くきかれたことから、より身近な地域の実情を知ることで、「外国につながる」人たちへの興味関心が高まることにつながる。
- 2) ある小学校での生活科の授業の実践を紹介したことで、ALTの先生と楽しく英語を学んでいたことを思い出した学生が多かった。そのことをきっかけに、子どもの頃から保育所、幼稚園、学校で出会った「外国につながる」友達や家族との出会いや交流を思い出し語り合う姿もみられた。教育現場での多文化理解につながる実践を紹介することは有効であると考ええる。
- 3) 多文化保育・教育における保育者の支援のあり方や役割について、授業を通しての学びと共に学生同士がグループワーク等を通して意見感想を述べ合うことは有効である。「外国につながる子ども」に対しての支援や配慮すべきことの内容を、具体的に話し合い、記述した感想を見せ合うことで、子どもや保護者に必要な援助や支援について学生自身が気づき、見出すことができたことはひとつの成果であると考ええる。

この「多文化保育・教育」の授業の実践は、これからの子どもの未来を担う保育者になる学生にとって、意義ある機会になったのではないかと考える。

しかしながら、無意識レベルでの外国人への思いこみや差別的な見方があることが一部の学生の感想や状況から伺えた。

外国につながる子どもが、日本の保育・教育の現場に入所してきた場合、「同化」や「同調」といった、「みんなと一緒に」を求めるのではなく「共生」を目指すことが大切であることの理解がなされたかまでは、本研究では確認することは難しかった。

多文化保育・教育のあり方について考えるためのテキスト「多文化保育・教育論」を作成したメンバーでもある5つの大学の研究者と共に、将来、保育者・教師になる予定の学生が国際交流や地域の外国人と共に生活することについて、アンケート調査を2017年12月に実施した。本学では保育学科1年生75名（保育原理後期授業履修者）に実施し、5つの大学より合わせて426名の回答を得られた。現在その調査結果を集計分析しているが、その調査結果をもとにさらに具体的な学生の意識や考えを明らかにし、保育の質的向上を目指すために必要な知識・能力・態度について考察を深め、「敬意ある共生」の実現に向けて多文化共生の意義の理解を示していける授業の展開を検証する。それらを通して、学生にとってのより豊かな学びと気づきを得るための、授業教材を提示し、今後の授業のさらなる充実をめざしたい。

【注 記】

引用文献

- (1) 清野美紀子「福島市立福島第三小学校 平成28年度研究公開要項」 2016. P 32
- (2) 咲間まり子編著 中野明子「多文化保育・教育論」株式会社みらい, 2014. P P 130~131
- (3) (2) P 132
- (4) 品川ひろみ 日本保育学会第7回大会口頭発表「スウェーデンにおける多文化保育の現状」記録より抜粋, 2017. (大会プログラムP 103参照)
- (5) 大谷千晴 (共著)「外国人の子ども白書」 明石書店, 2017 P 208
- (6) (5) P 209
- (7) 咲間まり子編著 中野明子「保育原理-はじめて保育の扉をあけるあなたへ-」株式会社みらい, 2017 P 128

(8) (5) P P 208～209

参考文献

咲間まり子編「多文化保育・教育論」株式会社みらい、2014

J. ゴンザレス・メーナ「多文化共生社会の保育者」北大路書房、2008

品川ひろみ「多文化保育における保育者の意識」現代社会学研究第24巻、P P 23～42 2011

高尾淳子「保育学生が認識する保育士の専門性(1)」愛知江南短期大学紀要41、P P 39～46 2012

堀田正央「多文化共生社会における保育士の専門性向上に関する研究」埼玉大学紀要(人間学部纂)第9号、P P 159～163 2009

山本尚史「保育者養成における多文化保育についての一考察」長崎女子短期大学紀要第40号、P P 48～53 2017

渡辺雅人「いじめ、レイシズムを乗り越える道德教育」高文獻、2014

文部科学省ホームページ(初等中等教育分科会)
「生活・総合的な学習の時間ワーキンググループにおける審議のとりまとめ(生活)」
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo_3/064/index.htm (2017年1月17日閲覧)

注 釈

1) “阿姨(アイ)”

中国語のお手伝いさん＝阿姨。上海に住む日本人からは阿姨さん(アイさん)と呼ばれている。日本人やイギリス人、フランス人等の外国人の家庭で、ベビーシッターや幼稚園の送迎等を含む家事手伝いとして雇われる場合が多い。

上海の阿姨さんのなかには、中国人が経営する幼稚園や日本人が経営する幼稚園で掃除や洗濯等用、日本の用務員のような仕事をする人たちもいる。

2) 日本人学校

海外においても、日本国内の小学校、中学校又は高等学校における教育と同等の教育を行うことを目的とする、全日制の教育施設である。小学校のみの地域もあるが、小学校、中学校を併設している所が多い。

その運営は日本人会等や進出企業の代表者、保護者の代表などからなる学校運営委員会によって行われて

いる。昭和31年(1,956年)にタイのバンコクに設置されて以来、平成24年4月15日現在では、世界50カ国・地域に88校が設置されており、約2万人が学んでいる。なお、平成23年には、中国の上海日本人学校に高等部が開設された。

3) 存在レベルでの自己肯定感

臨床心理士である高垣忠一郎は『『自分が自分であって大丈夫』という自己肯定感は、『自分を愛する心』と同様の意味だ。それは自分という存在をかけがえのない存在として受け入れ、愛することだ。それは、ナルシスチックな『自己愛』のように、自分を美しいから、有能だからという理由で愛するのではない。『自分を愛する心』は自分の全存在に向けられる』と述べ、そのとらえ方を「存在レベルの自己肯定感」と名付けている。

4) 見えない貧困

日本では子どもの相対的貧困率が1990年代半ばから上昇傾向にあり、現在はおよそ子どもの6人に1人が相対的貧困状態にある。相対的貧困とは、最低限必要とされる食料等が購入できないような絶対的貧困ではないが、地域社会の大多数より貧しい状態のこと。NHKは、2016年放送「見えない貧困」特集番組で、6人に1人の子どもが相対的貧困状態にあるが、ファストファッションや格安スマホなどの物質的粉飾や、家計を支える学生アルバイト、本人が貧困を隠すなどの理由で子供の貧困が見えにくくなっていると指摘した。

PBLにおける情報共有ツールとしてのSNS活用 ～福島学院大学における取り組みを事例に～

Use of SNS as information sharing tool in PBL—Case study of Fukushima College's approach—

木村 信綱
Kimura Nobutsuna

目次

はじめに

1. PBLにおける情報共有の重要性
2. SNSと専用ツール・Eメールの比較
 - (1) 専用ツール
 - (2) Eメール
3. スマートフォンとSNS普及率
 - (1) スマートフォンの普及率
 - (2) SNSの普及率
4. SNSの利用マナー教育について
5. 代表的なSNSの比較検討
6. Facebookの利点
7. PBLにおける「情報共有の仕組み」の具体的な内容
おわりに

はじめに

筆者は、平成18年から専門領域であるグラフィックデザインを軸にした地域連携PBL（ProjectBasedLearning／プロジェクト型学習）に取り組んでいる。当初は福島市近郊の企業や商店街のイベントポスターやウェブサイト制作など単発のデザイン制作受託が中心であったが、平成23年の東日本大震災をきっかけに、地域活性化や情報発信の仕掛けを作る段階から参画する機会が増え、温泉旅館の若旦那を特集した「若旦那図鑑」をはじめとする様々なプロジェクトを手掛けることとなった。

これらのプロジェクトは、正課の授業とは別に、自主的に参加する課外活動として展開している。そのため、都度ごとに新たに参加学生を募る必要があるほか、

学生と教員・学生同士の情報共有がプロジェクト成否の鍵となる。筆者は、情報共有のツールとしてSNS「Facebook（及びFacebookメッセンジャー）」を有効な手段であると考え、実際に活用している。本稿では、PBLにおける情報共有の仕組みとしてFacebookを活用する手法を紹介すると共に、専用ツール、Eメールや他のSNSとの比較検討を行う。

1. PBLにおける情報共有の重要性

平成24年8月の中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」において、知識の伝達・注入を中心とする従来の授業方式から、アクティブ・ラーニングへの転換が打ち出された。PBL

(Project Based Learning) は、「課題解決型」のアクティブ・ラーニングのひとつであり、受講生の自主性・自律性を伴いながらチームによって課題を解決することを旨とする教育手法である。

PBL には、授業内で展開する場合と、授業以外の課外活動として展開する場合があり、本稿で取り上げるのは後者である。これは、実際に地域社会で利用されるデザイン制作の場合、受託から納品までの期間が短く、授業シラバス作成の段階から盛り込んでおくのは難しいためである。従って、筆者が展開している PBL では、ある日突然クライアントからの依頼があってスタートすることが多い。

PBL 導入の手引きとして「先導的 IT スペシャリスト育成推進プログラム/PBL 教材洗練 WG」の「PBL (Project Based Learning) 型授業実施におけるノウハウ集」⁽¹⁾ は、PBL の導入から実施後の評価方法などについて事例を交えて詳細に記載されており、大いに参考になる。

このノウハウ集では、PBL 演習環境として特に準備が必要なものとして「情報共有の仕組み」を挙げており、グループで開発を進めるといふ PBL の性質上、グループのメンバー間デファイル共有の仕組みや、スケジュールを管理する仕組み、成果物のバージョンを管理する仕組みなど、さまざまな情報共有の仕組みが必要であると指摘している。

なお、授業以外に課外活動として PBL を展開する場合、ファイル共有やスケジュール管理の仕組みだけでは足りない。クライアントからの依頼があった段階で PBL に参加する学生を募るところからスタートするので、効果的にプロジェクトの内容を示し、有志を募る仕組みが必要である。また、授業と違って課外活動では単位を取得できないため、PBL に参加することで単位に代わる学びが得られることを示す必要もある。実際に参加した学生が体験を振り返って学びを実感できる仕組みや、安定して参加学生を確保するために、参加した学生にポジティブな情報を発信してもらい PBL に参加したくなる雰囲気作りも重要である。これらを踏まえて、PBL を課外活動として展開する場合の「情報共有の仕組み」に求められる要件を、以下の 6 項目に整理した。

- ①. 参加希望学生の募集
- ②. スケジュール調整
- ③. 進捗管理
- ④. 資料や制作データファイルの共有

⑤. 成果の共有 (発信)

⑥. 実績の蓄積

この 6 項目の要件を Facebook でどのように実現するかを詳しく述べる前に、SNS 以外の情報共有の手法 (専用ツール・Eメール) との比較、スマートフォンと SNS の普及状況について述べる。また、国内で普及している代表的な SNS について PBL における学生との情報共有の視点から特徴を整理する。

2. SNS と専用ツール・Eメールの比較

(1) 専用ツール

「情報共有の仕組み」について、情報工学分野の先行事例においては、専用の開発支援ツールやプロジェクト管理ツールを導入されている。先に紹介した PBL ノウハウ集にもプロジェクト管理ツールの「Microsoft Project」やコンテンツ管理ツールの「Wiki」を導入しているとの記述があるほか、日本工業大学工学部でオープンソースのプロジェクト管理ツール「Redmine」を導入した事例⁽²⁾や、帝京大学において新たにプロジェクトマネジメント/コミュニケーションサポートツールを独自開発している事例⁽³⁾などである。これらの専用ツールは情報システム開発などでの利用を目的に設計されており、ワークフローやタスク管理、ファイル共有、グループコミュニケーションなど様々な機能が充実していて、1つのツールを導入すれば開発に必要な環境を整えることができる点が魅力である。反面、新しく操作方法を覚える手間がかかり、導入コストや管理運用などの面でも SNS と比べて敷居が高い。

情報工学以外の分野では、例えば三重大学教育学部で 2006 年に PBL の支援ツールとして「Moodle」という eラーニングシステムを導入した事例⁽⁴⁾がある。主にプロジェクトの過程で作成したデータの共有と、参加学生と教員のコミュニケーション促進が主な導入の目的であるが、2006 年当時は SNS にこうした機能はまだ搭載されていなかった。現在はどちらも SNS で実現できる。

本学で展開しているグラフィックデザインを軸にした PBL の場合、システム開発ほど厳密なタスク管理を求めていること、ファイルの共有やグループコミュニケーションは SNS でも可能であること、加えて、新たに専用ツールの操作方法を覚えるよりも日頃使い慣れた SNS の方が容易に導入できること、そして、SNS を利用することで広く一般に向けた情報発信も兼ねることができることから、専用ツールよりも SNS が適し

表 1. 経年（平日）主なコミュニケーション系メディアの行為者率

			10代	20代	30代	40代	50代	60代
S	N	S	47.1%	59.4%	39.9%	31.2%	17.1%	4.6%
E	メ	ール	26.4%	43.8%	57.9%	48.9%	54.2%	32.5%
携	帯	通話	7.1%	12.9%	16.7%	18.4%	15.6%	17.2%

（※総務省情報通信政策研究所「平成28年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査（平成29年7月）」を元に筆者作成）

ていると判断した。

（2）Eメール

（社）日本ビジネスメール協会が3,088名を対象に実施した調査⁵⁾によると、仕事で周囲とコミュニケーションをとる主な手段としては「Eメール」（98.22%）が最も多く、「電話」（91.06%）、「会う」（75.97%）と続く。電話や直接会うためにはお互いの時間や場所を合わせなければいけないのに対して、Eメールは時間や場所を制限されない非同期型のコミュニケーション手段としてビジネスの現場で多用されている。

しかし、表1に示すように、10～20代の主なコミュニケーション手段はSNSであり、30代以上の年齢層でEメールが主に利用されているのとは対照的である。若い世代が全くEメールを使わないというわけではないが、ビジネスツールとして日常的にEメールを使うようになるのは就職先で必要に迫られた場合以降で、学生の段階ではEメールは使い慣れないコミュニケーション手段と言える。Eメールでグループでの情報共有を実現するためには、逐一CC（BCC）にメンバーのアドレスを追加するか、メーリングリストを利用する必要があり、使い慣れていない学生たちにとっては送信先の追加漏れや誤送信などの恐れがある。

更に、若い世代では、スマートフォンにEメールが着信しても返信せずに放置したり、Eメールを開封せずに溜め込む傾向があることを知っておく必要がある。内定者フォロー・新入社員研修SNS「エアリーフレッシュャーズ」を提供するEDGE株式会社が内定者世代（20、21歳）200名を対象に実施した調査⁶⁾によると、所有するスマートフォンには平均576件の未読メールがあり、37.5%が「過去に重要なメールを見逃したことがある」と回答している。これは、SNSサービスで標準装備されている「既読」表示機能がEメールには無いことが主な原因であろう。Eメールは「既読」したかどうか一切通知されないで「メールに気づかなかった」などの言い訳が立ちやすいのである。筆者のこれまでの経験では、学生たちにも明らかにこの傾

向が見て取れる。

以上のように、学生たちはEメールを使い慣れておらず、着信しても無視することがあるので、重要な情報や緊急のやり取りには適していない。

3. スマートフォンとSNS普及率

（1）スマートフォンの普及率

Apple社のiPhoneが日本国内で販売開始になった2008年を皮切りに、スマートフォンは急速に普及してきた。「平成29年度情報通信白書」（総務省／2017）によれば、スマートフォンの世帯普及率は71.8%であり、固定電話（72.2%）やパソコン（73.0%）に匹敵する。年代別に見ると、20代では94.2%、13～19歳では81.4%であるから、今日の大学生については、ほぼ全員がスマートフォンを所有していると見て良いだろう。

なお、スマートフォンを所有していなくても、パソコンや所謂「ガラケー」のブラウザからもSNSを利用できる。ただし、パソコンの場合は常に持ち歩いているでもリアルタイムで通知を受け取ることが難しく、「ガラケー」の場合は一部の機能が制限される場合があるのでサポートが必要である（ガラケーでの機能制限については機種や利用するSNSによって異なるため、本稿では詳述を避ける）。

また、一般的にスマートフォンの購入と同時に定額制パケット通信プランに加入しているため、PBLの情報共有に学生個人の所有するスマートフォンを利用することで新たなパケット通信料が発生する心配は少ない。ただし、高解像度の画像や動画のような大容量のファイルをやり取りするようなプロジェクトでは、キャンパス内のLANやWi-Fiを利用できるよう環境を整える必要がある。

（2）SNSの普及率

SNS（social networking service）とは、ウェブ上で社会的なネットワークを構築可能にするサービスのことである。日本ではGREEとmixiが2004年にサービスを開始し、今日では10～20代のスマートフォン利用時

表2. 年代別にみた代表的 SNS の利用率 (2016)

	10代	20代	30代	40代	50代	60代
L I N E	79.3%	96.3%	90.3%	74.1%	53.8%	23.8%
T w i t t e r	61.4%	59.9%	30.0%	20.8%	14.2%	4.6%
F a c e b o o k	18.6%	54.8%	51.7%	34.5%	23.5%	10.6%

(※総務省「平成29年度情報通信白書」を元に筆者作成)

表3. SNS の利用マナーとして教育すべき内容

(1) 著作権などの知的財産権を侵害する内容を書かない
(2) 特定の人種や民族、集団への差別や偏見と受け止められるような内容を書かない
(3) 匿名で利用している場合、実名の特定に繋がるような内容を書かない
(4) 事実と異なる内容や事実関係があやふやな内容を書かない
(5) 無暗に他人を挑発するような内容を書かない
(6) 他人からの批判的なコメントには冷静に対応する
(7) 他人への誹謗中傷と受け止められるような内容を書かない
(8) 本人の許可なく他人の個人情報やプライバシーに関わる情報を書かない
(9) 仕事の具体的な内容など守秘義務のある情報を書かない

(※総務省「社会課題解決のための新たな ICT サービス・技術への人々の意識に関する調査研究 (平成27年)」を元に筆者作成)

間の多くを「SNS 見る・書く」時間が占めている。2017年現在、国内でユーザー数が多い SNS は、LINE (およそ7,000万人)、Twitter (およそ4,500万人)、Facebook (およそ2,800万人) の3つである。

年齢別に見ると、LINE は全年齢層で最も利用されており、10代では79.3%、20代では96.3%が利用していることから、学生のほとんどがスマートフォンにLINEをインストールしていると見て良いだろう (表2)。

一方、Twitter と Facebook は利用していない学生もいるので、PBL で活用する場合にはインストールを促し、必要ならインストール方法・ユーザーアカウント取得方法・利用方法についてサポートする。なお、Twitter も Facebook もインストールやアカウント設定などの初期設定は比較的容易で、他のスマートフォンアプリを使いこなすことができる学生であれば一人で行えるだろう。特にサポートが必要なのは投稿内容についてで、特に SNS が原因となるトラブルを予防するためのマナー教育が重要である。

4. SNS の利用マナー教育について

日頃から SNS を活用している学生はある程度の利用方法とマナーを心得ているが、PBL の情報共有のために SNS を使い始める学生については、基本的な利用マナーやトラブル予防についてレクチャーする必要がある。

なお、「学生はスマホや SNS を使い慣れているから注意しなくても大丈夫だろう」と見なすのは誤りである。総務省の調査によれば、おおむね年代が下がるほどトラブルにあった人が増える傾向にあり、20代以下では SNS 利用者のうちの26.0%が何らかのトラブルにあった経験をもっている⁽⁷⁾と回答している。トラブルの主な内容は、「自分の発言が自分の意図とは異なる意味で他人に受け取られてしまった (誤解)」、「自分は軽い冗談のつもりで書き込んだが、他人を傷つけてしまった」、「ネットで他人と言い合いになったことがある (喧嘩)」、「自分の意思とは関係なく、自分についての個人情報や写真などを他人に公開されてしまった」などである。そこで、同調査の「SNS を利用する際の注意事項」について、20代以下の年齢層があまり注意していない事項に着目し、学生に対して SNS の利用マナーとして教育すべき内容を挙げる (表3)。筆者は学生たちに対して、「匿名で利用できる Twitter と同じ感覚で気軽に投稿するとトラブルの原因になりやすいことを伝え、「Facebook には親や教員に見られても問題ない内容だけを投稿すること」を徹底している。

表4. SNS の比較検討

	LINE	Twitter	Facebook
匿名性	匿名で利用可能 (1人1アカウント)	匿名で利用可能 (複数アカウント可能)	実名登録 (1人1アカウント)
既読機能	既読の人数のみ表示	既読のマークのみ表示	誰が既読か氏名まで表示
グループ機能	グループにつき タイムライン1つ	グループにつき タイムライン1つ	グループ内で複数のやり取りが可能(メッセージャーでは1グループにつきタイムライン1つ)
パソコンからの利用	パソコン用アプリをインストール+2段階認証	ブラウザから利用可能	ブラウザから利用可能
多様なファイルの送受信	画像・動画の他、書類などを送受信可能	画像・動画ファイルのみ	画像・動画の他、書類などを送受信可能

(2018年1月時点での仕様を元に、筆者が作成)

5. 代表的な SNS の比較検討

SNS サービスは頻繁にアップデートし、お互いに似たような機能を追加しているが、大きく違うのは「匿名で利用できるか」である。PBLでの情報共有においては学生同士だけでなく社会人も連絡を取り合うことがあるので、実名で登録する Facebook が適していると言える。

また、PBLでの情報共有に用いる場合のポイントとして、投稿やメッセージを読んだかどうかを把握する「既読機能」の充実、グループ機能の充実、スマートフォンだけでなくパソコンからも利用しやすいこと、多様なファイルの送受信ができることなどがポイントとなるが、いずれの機能も他と比べて Facebook が充実している。

表4に、代表的な SNS (LINE/Twitter/Facebook) の主な機能に加えて、「匿名性/既読機能/グループ機能/パソコンからの利用/多様なファイルの送受信機能」について比較した。なお、SNS の機能や特徴は本稿執筆時(2018年1月)のものである。

学生との情報共有に SNS を利用する場合、まずは教員が実際に使ってみて、機能や特徴を十分に把握しておく必要がある。

6. Facebook の利点

Facebook は、文章や写真を投稿するブログのようなサービスである。お互いの投稿にコメントしたり、「いいね!」や「シェア」をすることでユーザー同士がコミュニケーションする。基本設定では Facebook を利用

していない人も含めて誰でも投稿を閲覧や検索ができるが、投稿の閲覧を許可するユーザーを指定したり、投稿ごとに細かく公開条件を設定できる。また、Facebook メッセージャーという LINE や Eメールと似た機能を備えている。(スマートフォン上では、2014年以降は Facebook 本体とは別のアプリケーションとして利用する)

以下に、LINE や Twitter と比べた際の利点を挙げる。

(1). 実名登録でる(匿名では利用できない)

LINE と Twitter は匿名で利用できるが、Facebook は実名での登録を求めている。現実世界の延長として信頼関係を築いたりコミュニティを拡げることができるので、社会人がビジネスや趣味の情報を発信するツールとしては非常に優れている。逆に、10代・20代にとっては実名登録がハードルとなり、あまり普及していない。PBL で導入するには、まず学生たちに Facebook の有効性を伝え、アカウント登録や利用方法をサポートする必要がある。

(2). 詳細な既読機能を実装している

Facebook のグループ投稿とメッセージャーには既読機能があり、誰が既読(未読)なのかが表示される。LINE や Twitter では既読人数しか表示されないのに対して、学生からの素早いレスポンスが期待できる。

(3). グループ機能が充実している

グループごとに1つのタイムラインしか利用できない LINE や Twitter と違い、Facebook のグループには複数のタイムラインで同時に情報交換できる。グループは公開/非公開を設定でき、メンバーだけが閲覧できるように投稿したりファイルを共有したりすること

ができる。Facebook メッセージャーでもグループを作成することができるが、こちらはグループにつきタイムラインが1つなので、話題ごとにグループを作成する必要がある。

筆者の場合は、学年ごとのFacebookで「グループ」を作成し、学年全体への情報提供やプロジェクト参加募集など、学生掲示板のような使い方をしている。また、個々のプロジェクトごとにメッセージャーでグループを作成し、参加メンバーと情報共有している。

(4). パソコンから利用しやすい

Facebook は新たにアプリをインストールせずにパソコンのブラウザからログインできる。ログインに必要なのはユーザー名とパスワードのみ（暗証番号の二段階認証は不要）で、LINE と比べると大学の共用パソコンなどでも気軽に利用できる。ただし、共用パソコンで利用した際は利用後にログアウトを徹底させる必要がある。

(5). 多様なファイルを送受信できる

Facebook のグループとメッセージャーでは、画像や動画ファイルの他に Word/Excel や PowerPoint などのオフィスファイル、PDF ファイルなど様々なファイル形式を送受信できる。ファイル容量は、グループでは300 MB まで、メッセージャーでは25 MB までで、それ以上のファイルは Dropbox などのクラウドストレージサービスを併用する。

7. PBL における「情報共有の仕組み」の具体的な内容

先に掲げた PBL における「情報共有の仕組み」の要件 6 項目について、筆者の実例を紹介しながら、それぞれのポイントを示す。

(1) 参加希望学生の募集

課外活動として PBL を展開する場合の最初のハードルは参加する学生を募ることである。筆者は Facebook で学年ごとにグループを作成し、掲示板のような情報提供ツールとして活用している。その際、文章だけの投稿よりも画像を添えたり、例えば「コミュニケーション能力」は「コミュ力」というようにネットスラングや顔文字などを取り入れると学生の反応が良くなるようだ。

学生を募集する際に提供する情報は以下のとおり。

- ①. プロジェクトの基本情報（いつから、いつまで、どこで、何を、どんな頻度で）
- ②. どんな学生に参加してほしいか（履修科目、ス

キルレベル、意欲、人数など）

- ③. どんな学びの機会になるか
- ④. 募集メチ

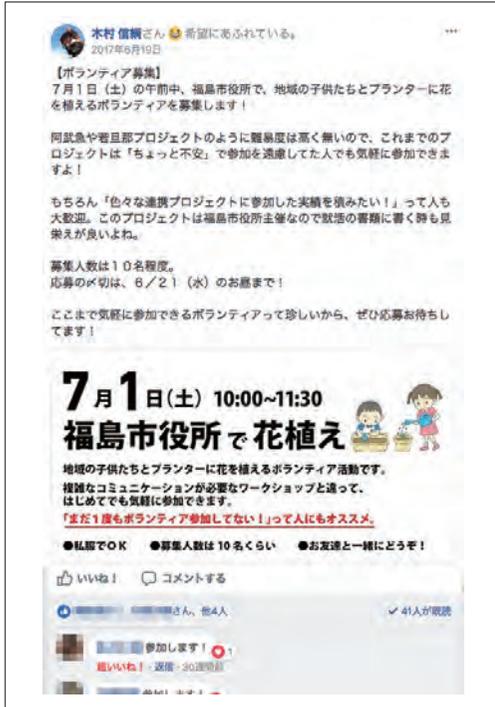
募集において特に重要なのは③である。先に述べたように課外活動で PBL を展開する場合は単位に代るインセンティブを示す必要があるが、筆者の経験では「参加しないことで学びを得られない」というマイナスの表現よりも「参加するとこれだけの学びを得られる」というプラスの表現の方が参加を得やすいようだ。学生にとって PBL プロジェクトは「学びの機会」なので、たとえば社会福祉系のボランティア活動のように、プロジェクト自体が社会的な意義を持っている場合でも、学生にとって「このプロジェクトに参加することでどんな学びを得られるのか」を明示した方が良い。また、地域との連携を実績として積み重ねることで就職活動でアピールする材料が増えると書き添えることで、複数のプロジェクトに積極的に参加するメリットを提示している。

①で重要なのは期間や時間を明示することである。学生たちは納期や主な活動時間と頻度によって、授業やアルバイトなどの予定を縫ってプロジェクトに参加できるかどうか判断するからで、従って PBL をスタートする段階でクライアントと納期に至る大まかなスケジュールだけは最低限しっかり詰めてから学生を募集する必要がある。また、②について、意欲があれば誰でも参加できるのか、どういったスキルがどのレベルで必要なのかなど、求める学生の条件を明確にすることも重要である。学生を多く集めたいがためにハードルを低く見せて募集すると途中で脱落したり不完全燃焼に終わってしまい、次に繋がらないので、条件はできるだけ具体的に示すべきである。

図 1 は福島市が主催する植栽イベントで地域の子供たちと一緒に花を植えるボランティアを募集した際の投稿である。基本情報の他に、気軽に誰でも参加できる点と地域と関わる実績を積む機会であることをアピールして 14 名の参加を得た。図 2 は阿武隈急行線の 30 周年記念イベントの内容を検討するワークショップの参加を募った際の投稿である。鉄道会社の社員 9 名とのプレストが中心で、期待できる学びを明示したことで急な募集にも関わらず、意欲的な学生 6 名の参加を得ることができた。

投稿の下に表示されている「○人が既読」という文字をクリックすると、誰が既読で誰が未読なのかを確認することができる（図 3）。前述のように Eメールの

図1 / 実際の参加募集投稿例「福島市が主催する植栽イベント」



(※参加学生募集用の画像を含めて全て筆者が作成)

図2 / 実際の参加募集投稿例「阿武隈急行線の30周年記念イベントの内容を検討するワークショップ」



(※参加学生募集用の画像を含めて全て筆者が作成)

図3 / グループ投稿の既読・未読表示画面



(※実際の投稿を元に筆者が作成)

場合は無視する学生もいるのに比べて、誰に情報が届いているのかを把握できる既読機能は非常に有用である。また、参加申し込み先にそれぞれの投稿のコメント欄を使うことで、学生たちはリアルタイムで仲間の動向（何人参加予定か、誰が参加予定かなど）を知ることができる。

(2) スケジュール調整

筆者は、スケジュール調整は参加する学生だけのメッセージグループで行う。スケジュール調整のやり

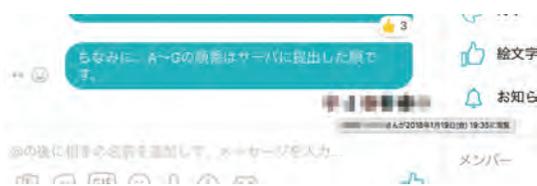
取りを学年ごとの Facebook グループでやり取りすると、プロジェクトに参加しない学生にも頻繁に通知が表示されてしまうので、クローズドなメッセージグループの方が適している。なお、いくつかの候補日を挙げて全員の予定を確認する場合には「調整さん」(<https://chouseisan.com>)などの無料ツールを活用するのも有効である。

Facebook メッセンジャーでは、前述のグループと同様に誰が既読になったのかを把握する機能を備えている。何時何分に誰がそのメッセージを読んだのかを知ることができる(図4)ので、Eメールのように相手が読んだのかを把握できないツールに比べて学生と円滑にやり取りできる。

(3) 進捗管理

進捗管理については、プロジェクト管理専用ツールの方がタスク管理機能が充実している。Facebook メッセンジャーを利用する場合はEメールのように文章と画像での進捗確認が中心となるため、事前に「いつ、

図4 / Facebook メッセンジャーの既読表示 (アイコンにマウスを重ねると、既読になったユーザー名と日時が表示される)



(※実際の投稿を元に筆者が作成)

誰が、何について状況を報告するか」を決めておく必要がある。

なお、課外学習として実施する場合は空きコマや放課後に時間を合わせて展開することになるため、授業やアルバイトなどで残念ながら参加できない学生へのフォローが必要である。メッセンジャー上でこまめに進捗状況を共有しておくことで、欠席した学生が次回スムーズに合流でき、途中で離脱する学生を予防する効果が期待できる。

(4) 資料や制作データファイルの共有

ファイルを共有するだけなら、USB メモリや、学内ネットワークの共用サーバ、「Dropbox」などのクラウドストレージサービスを利用の方が大容量のファイルをやり取りできるが、Facebook メッセンジャーであればファイルのやり取りを時系列に沿って把握でき、誰が既読になったのかも把握できる。

Facebook はパソコンのブラウザからログインでき、メッセンジャーで最大25 MB までの画像・動画の他、Word や PDF など様々な形式のファイルを送受信可能である。

(5) 成果の共有 (発信)

筆者は、例えばワークショップの模様や参加者の集合写真などをこまめに撮影してメッセンジャー上で参加学生にシェアし、学生たちには写真を受け取ったその日のうちに Facebook に感想を添えて投稿するように指導している (図5 / 図6)。学生自身が感想を投稿することで体験を振り返り、何を学ぶ機会になったのかを明確にする効果が期待できる。そのために、例えばワークショップ終了後に「何を学んで欲しかったか」を教員から解説し、学生の言葉で体験を振り返る時間を (短くても良いので) 確保している。また、投稿を

通じてプロジェクトに参加しなかった学生たちはもちろん学外にも成果が共有される。新聞やテレビなどのマスメディアと違って、SNS は投稿を見たユーザーから直接「いいね!」やコメントをもらうことができ、他者から活動を評価されることで学生たちのモチベーションが高まり、また参加したくなる好循環が生まれる (図7)。

(6) 実績の蓄積

Facebook はブログに似たサービスなので、前項のように学生自身が PBL の取り組みを投稿すると、その情報が蓄積されていく。学生たちにとっては、就職活動において履歴書よりも詳細な活動記録として活用できる。「ソーシャルリクルーティング白書2012」によれば、応募者や面接予定者の SNS アカウントをチェックした経験がある採用担当者は50.3%で、約1割が SNS アカウントをチェックした結果、不採用にした経験があると回答している⁹⁾。従って、実名で登録する Facebook は就職活動で企業がチェックするのを前提に、積極的に実績を蓄積すべきである。その際、採用担当者が不快に感じるような投稿をしないように、先に述べた SNS の利用マナー教育も忘れてはならない。

学生の活動実績が蓄積されていくことで、大学の取り組みを地域社会に向けてアピールすることができる。大学による公式な情報発信よりも、学生自身の言葉で綴られた SNS の投稿の方が信頼性が高く、積極的に学生の投稿を推進することで大学が得られるメリットがあると言える。

このように、広く一般に向けて実績を発信できる点は、専用のプロジェクト管理ツールには無いオープンな SNS ならではの利点と言えよう。

おわりに

筆者は現在複数のプロジェクトを同時並行で進めているが、学生との情報共有の仕組みとして Facebook 無しには成立しない。Facebook を活用して好循環を構築できるようになるまでには、なかなか学生が集まらなかつたり、折角参加してくれた学生が途中でモチベーションを維持できなくなってしまうことが多々あった。当初は情報工学系の PBL で導入実績のある専用のプロジェクト管理ツールも検討したが、学生たちが慣れ親しんだスマートフォンで気軽に操作でき、広く情報発信できる点に魅力を感じた SNS を活用するようになり、機能を比較した結果 Facebook を選択した。

図5／福島市主催の植栽イベントに参加した学生の投稿



(※実際の投稿を元に筆者が作成)

図6／阿武隈急行線のワークショップに参加した学生の投稿



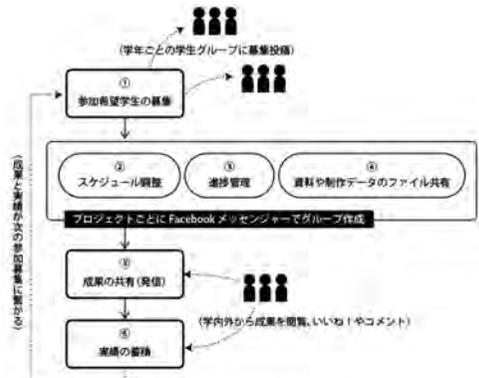
(※実際の投稿を元に筆者が作成)

SNSは頻繁に仕様変更されるので、Facebookがいつまで現状のサービスを提供するかは不明である。Facebookに代わるSNSが現れるかもしれない。その時々で、本稿で提示したPBLの情報共有の仕組みに求められる要件に照らし合わせて最適なSNSを選択することになるだろう。

「注記」

- (1) 先導的ITスペシャリスト育成推進プログラム
拠点間教材等洗練事業PBL教材洗練WG編：
「PBL (Project Based Learning) 型授業実施におけるノウハウ集」, (2011), p2
<http://grace-center.jp/wp-content/uploads/2012/05/pblknowhow_20110726.pdf>
- (2) 日本工業大学 工学部情報工学科知能ソフトウェア工学研究室(橋浦研究室)黒川竜生：「PBLにおけるプロジェクト管理支援環境～Redmineの導入におけるTicket駆動の実践～」, (2016), p1,
<http://kbselab.com/pdfs/201603_kurokawa.pdf>

図7／情報共有の仕組み概略図



(※筆者が作成)

- (3) 帝京大学ラーニングテクノロジー開発室 佐々木茂, 荒井正之, 高井久美子, 小川充洋, 渡辺博芳, 「PBLによるプロジェクト管理演習のためのコミュニケーション支援ツールを用いた授業実践(情報処理学会第79回全国大会)」, (2017), p2
- (4) 三重大学教育学部 根津知佳子, 森脇健夫, 松

本金矢, 京都大学高等教育研究第12号:「教員養成型 PBL 教育の課題と展望～Moodle を使ったのチューター・学生の自立的活動の支援を通して～」, (2006), p27

- (5) 一般社団法人日本ビジネスメール協会:「ビジネスメール実態調査2016」, (2016), p1
 <<http://www.sc-p.jp/news/pdf/160701PR.pdf>>
- (6) EDGE 株式会社:「メールを見ない内定者世代、最大未読件数は17,841件! EDGE 内定者世代調査「メール未読件数576件(※200名平均)」, (2017), p1
 <<https://www.atpress.ne.jp/news/131003>>
- (7) 総務省:「社会課題解決のための新たな ICT サービス・技術への人々の意識に関する調査研究(平成27年)」, (2015), p36-37, <http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/linkdata/h27_06_houkoku.pdf>
- (8) スマートアンサー調査レポート:「10代女性 Twitter ユーザーの4人に3人は複数アカウント持ち! Twitter に関する調査結果」, (2016)
 <<https://smartanswer.colopl-research.jp/reports/0a6950e6-241d-443e-8cea-a6727f03c71a>>
- (9) 新卒採用.jp, 「【garbs 調査報告】「ソーシャルリクルーティング白書2012」50%以上の企業が

応募者のソーシャルメディアをチェック! 約1割は不採用にした経験も!」, (2012)

<<http://hr-recruit.jp/pubnews/dtl/769>>

【参考文献】

- ・中央教育審議会(2012)(答申)「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」,
 <http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2012/10/04/1325048_1.pdf>
- ・木村忠正, 平凡社新書(2012), デジタルネイティブの時代～なぜメールせずに「つぶやく」のか～
- ・総務省(2017)「平成29年度情報通信白書」
 <<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/white-paper/h29.html>>
- ・総務省情報通信政策研究所(2017), 「平成28年情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査<概要>」, <http://www.soumu.go.jp/main_content/000492876.pdf>
- ・長岡千香子, 熊本大学 e ラーニング授業設計支援室ランチオンセミナー資料(2014),
 <http://cvs.ield.kumamoto-u.ac.jp/wpk/wp-content/uploads/2014/12/luncheon_ppt2014_nagaoka_2.pdf>

福島学院大学 研究紀要

collection vol.54

平成30年3月27日 発行

編集・発行 福島学院大学
〒960-0181 福島市宮代乳児池1-1
TEL 024-553-3221(代)

制作 株式会社山川印刷所
〒960-2153 福島市庄野字清水尻1-10
TEL 024-593-2221(代)

1. An inquiry into a study of teaching music expression at a nursery school and a school for nursery and kindergarten teachers training :Focusing on the survey by questionnaire at the preschools
Atuko Sto 1

2. Study on Tendency of Characteristic of Student's Body Expression
-Focusing on the Movements Imaged from Nursery Rhymes-
Kazuko Nagakubo 13

3. A search for effective teaching materials that gain awareness and understanding about the role of teacher.
-A focus on the impressions of students in multicultural nursery -related classes.-
Akiko Nakano 29

4. Use of SNS as information sharing tool in PBL
-Case study of Fukushima College's approach-
Kimura Nobutsuna 43